

スペイン領モロッコ植民地の「平定」(1926～1931年)

——「原住民」統治／軍事基地／軍アフリカ派——

深澤 安博

RESUMEN

En los años 1926-1927 los ejércitos hispano-franceses aplastaron las resistencias rifeñas en Marruecos. La guerra colonial española de 18 años llegó al término. ¿Cómo el ejército español va a ‘pacificar’ la zona norte de Marruecos? ¿Cómo va a dominar o regir ‘los indígenas’ y a organizar los ‘soldados indígenas’? El Marruecos español se convertirá en ‘un gran cuartel’. ¿Qué significado o consecuencia traerá en la metrópoli ‘la pacificación’ de Marruecos? Aquí aparece la presencia de los militares africanistas que dominaron el Marruecos español como si fuera su propio territorio.

はじめに

1926年5～6月、モロッコを保護領＝事実上の植民地として支配しようとした植民地国家の共同軍事行動によってリーフ勢力の政治体は瓦解を余儀なくされ、リーフ人たちの組織的抵抗もほぼ潰されてしまった。それでも、その後も個々の抵抗は続いた。在モロッコ・スペイン軍が「平定」＝リーフ戦争の終了を宣言するのは27年7月のことである。かくして09年に始まった20世紀スペインの「18年戦争」は終わった。¹

以上のことを踏まえて、本稿が明らかにしたいことは主に次の3点である。第1に、スペイン軍・スペイン国家によるモロッコの「平定」＝植民地統治の開始はどのようになされたのか。第2に、どのような「原住民」統治方法が導入されようとしたのか。ここでは「原住民」兵部隊の編成にも注目する。第3に、モロッコ植民地の「平定」はメトロポリの政治・社会にとってどのような意味を持ったのか。ここでは、とくにモロッコ植民地の軍事基地化と、この植民地を実質的に統治することになった軍アフリカ派がメトロポリでも政治的・社会的役割を持ち始めたことに注目する。²

本稿の対象時期は、上述のようにリーフでの組織的抵抗が終わった26年中葉からメトロポリでの第2共和政成立(31年4月)までの約5年間である。

研究史について触れると、本稿と問題関心を共有する研究がとくにこの10年間にいくつか現れている。³しかし、モロッコ植民地の平定期についての考察は多くはない。⁴

筆者の資史料理解の制約もあり、本稿ではモロッコ人が平定や原住民統治にどのように応じたかはほとんど示せない。

I. 植民地モロッコの「平定」

1.1. 「全面的制圧」——18年戦争の終結——

26年6月初頭、スペイン領モロッコ（以下、スペイン領）高等弁務官サンフルホは、議会なき専制政府の首相プリモ・デ・リベラ（以下、プリモ）に次の方針を提示した——第1地域（メリーリャ周辺と東部地域）では「軍事行動」を続ける、第2地域（中部地域）では「政治的・軍事的行動」によって原住民を降伏させ武装解除をおこなう〔「政治的行動」とは、資金や地位提供による部族有力者の買収のこと〕、第3地域（西部地域）では最初は「政治的に」動き、必要なら「軍事的圧力」を加える。早くも同月下旬、サンフルホはやはりプリモに対して、上の目的をほぼ達成した、「危急の事態が起きなければ、今は短期間で全地域を全面的に降伏させて、[モロッコ]問題を片づけるチャンスであると考ええるものです」と報告した。そのうえでサンフルホは提示した——「全面的制圧」も可能である、しかし、既占領地とこれから占領していく地域の範囲はかなり広く、そのための兵力が不足している、かくして現時点で考える方針は3つある、第1はここで作戦を中断し、今は全面的占領を断念すること、これは「[モロッコの]問題はほとんど終わったと信じている国[メトロポリ]に大きな失望をもたらすだろう」、また中部地域で新たな「反乱」を生じさせるかもしれない、第2は全地域の軍事的占領のためにメトロポリから5～6千人以上の援軍を派遣すること、第3はメトロポリからは援軍を得ず、原住民兵力を「大きく増やす」ことによって作戦を続けること、これは今は「高くつく」としても、おそらく「最も安価で政治的に良い方策」である、このようにして原住民兵力を確立することができればメトロポリの兵力を帰還させることができるからである。⁵

以上は、26年中葉にスペイン軍が、今やスペイン領の「全面的制圧」が可能となったと見たこと、メトロポリのモロッコでの戦争への関心とくに徴募兵の動員あるいは帰還に注意を払っていたこと、今後は（も）さらに原住民兵力に依拠して平定作戦を実行しようとしたことを明確に示している。サンフルホは、「政治的・軍事的行動」の成功のために、「部族間の統一」が崩れること、それを崩すことに大きな関心を払った。それ故に、今後の原住民統治においては各部族を別個に統治するのがよく、「部族連合」などは「非常に危険」であると付加することを忘れなかった。部族間の分断を図ることは、これ以前もこれ以後もスペイン領の原住民統治政策の根幹を成したからである。⁶

実際にも、27年中葉まで続いた戦闘は、個々の抵抗はあったとしても、ほぼサンフルホが描いたシナリオ通りになったと見てよい。26年5月にスペイン軍が制圧していたのは14部

族だった。しかし、スペイン軍史が称賛する「カパス [少佐、後に中佐] の急襲」(26年6月中旬開始)によって、戦闘適期である同年10月までの期間にスペイン領66部族のうち55部族が制圧された(部族の区分は、以下、スペイン植民地行政当局によるもの)。主に4月から再開された27年前半の戦闘で、西部地域といくつかの抵抗拠点もスペイン軍の手中に落ちた。⁷

サンフルホが意図していたように、上記の期間の平定作戦では原住民兵力とくにハルカ *harka* (臨時的な小戦闘集団。スペイン軍の規定では「補助的で不正規の諸兵力」) が大量に用いられた。26年末の西部地域の作戦では、「ヨーロッパ兵」(この認識枠組みについては2.1.で後述) 約2,500人に対し、原住民兵約4,200人が動員された。リーフ勢力の拠点だったバヌワリャガール部族の住民によってハルカを組織し、このハルカを前衛の突撃部隊として用いることが意識的になされた。それは、「バヌワリャガールのリーフ人が勇敢な闘士だということはよく知られている」ので未服従部族への強力な圧力となるし、「数か月前まで我々の敵だったアブドゥルカリームの闘士たちが我々の側で闘っている」ことの効果は大きいとみなされたからだった(この時期にモロッコ作戦軍参謀長で[植民地]行政監察およびハリーファ軍監督局 *Inspección General de Intervención y Tropas Jalifianas* (IGITJ. この組織については2.1.で後述) 総監だったゴデー)。かくして、現地のアフリカ派軍人のマニフェスト誌『植民地軍雑誌』 *Revista de Tropas Coloniales* (RTC. セウタ、編集長はフランコ) の26年8月号には誇らしげな論評が現れた——「[カパスの急襲という] この見事な事業では原住民をうまく使うことの効果が現れた」、これでメトロポリの人員を節約できるだけでなく、植民地軍を準備できる。⁸

スペイン軍(上述のように実際には原住民戦闘員が多)の前進に抵抗した者は「逃亡者」*'huidos'* と呼ばれるようになった。抵抗者たちが主に山間部に退却して、そこから時々攻撃したからである。彼らは食糧補給と山間地の生活条件に苦しまなければならなかった——「抵抗者たちの状況はますます厳しくなっている。彼らの活動範囲は狭まり、食糧補給に大いに苦しんでいるからである。そのうえ、冬の厳しさが彼らが追いやられた所での生活をますます悲惨なものにしている」(26年12月のIGITJの報告。多少の誇張にも注意すべきである)。26年8月と10月に、「正当な権力に対する無法な行為への相応な制裁」としてアブドゥルカリームとその家系の者ならびにその協力者の全資産没収のハリーファ(スペイン領でのスルタンの被委任者)令が出されていた。スペイン軍が平定宣言をした27年7月には、「逃亡者」は1か月以内に出頭せず武器を引渡さなければ、その全資産を没収されるとのハリーファ令が出された。巧妙なことに、「逃亡者」から没収された資産はハリーファ軍兵士やハルカ戦闘員のものとなることが喧伝された(実際の措置は不詳)。27年からは、「逃亡者」追及の一環として各部族で不在者調査がおこなわれた(2.1.で後述)。抵抗者には、絶望的な逃亡を続けるか(捕まったら拷問と処刑)、スペイン軍に帰順するか、あるいはタンジャマまたはフランス領モロッコ(以下、フランス領)に逃亡するかの選択肢しかなかった。⁹

原住民の武装解除と武器押収こそ平定の「基本原理」とされた（行政監査官のための『マニュアル』、28年）。諸部族を武装解除しなかったら「1926～1927年の戦闘での急速な前進はありえなかっただろう」（ゴデー）。市場には、武器隠匿には厳罰とのお触れが出された。武器不法所有者の処刑、住居の搜索、密告の奨励、拷問、さらには故意に村落を襲撃して防衛に使用された武器を押収することや逃亡者のフランス領での武器押収もおこなわれた。リーフ戦争開始（21年6～7月）から25年9月（アルホセイマ上陸作戦）までの押収武器数は約8,000点だったが、26年中葉から精力的な押収がおこなわれ、27年末までにそれは約6万点となった。公的な平定宣言後もとくに29年まではかなりの量の武器が押収された。結局、30年までに総計75,642丁の銃とその他の武器が押収された（以上、公式統計。押収武器のほとんどは銃だったが、他にも刀剣類、大砲類、砲弾などの兵器と戦闘用品の全てが押収された）。かくして、30年9月、公的に武装解除終了が宣言された。抵抗者から押収された武器の一部（27年末に約40%）はメトロポリにも送られた。¹⁰

27年7月、在モロッコ・スペイン軍はサンフルホ名で平定宣言を出した——「18年間、諸政府を悩まして来たモロッコでの戦闘が終わった」。「諸政府」と言って「スペイン国民 nación（あるいは人民 pueblo）」と言わない（もちろん「モロッコ人」とは言わない）ところにサンフルホの認識がよく表れている。メトロポリのスペイン政府が公式の戦闘終了宣言を出したのは同年10月（12日）だった（サラゴースで「平定記念祝典」を開催）。翌11月、「モロッコ平定勲章」授与の勅令が出された。勲章の表には「平定 PAZ 1909－1927 モロッコ」の語が刻まれた。受勲対象者は広範囲に渡った。まず「戦争が開始された1909年7月9日から平定記念祝典日の1927年10月12日まで」のいずれかの時期にモロッコでの戦闘に参加したスペイン陸海軍の将兵本人とその子、さらには原住民兵諸部隊の将兵本人とその子（原住民兵までも対象者!）。他の主な対象者は、モロッコ保護領での全行政官、モロッコでの戦闘で死んだ将兵の父母・兄弟・未亡人、在アフリカ軍や保護領行政には加わらなかったが「モロッコでの我が国の行動の大成功」に貢献した「ムスリムとユダヤ人」など。「1909年6、7月および1921年7月から12月までメリーリャにいた住民」という範疇もあった。さらに25年7月以降にスペイン領での戦闘に関わったフランス軍人・行政官も対象とされた。ここにはモロッコ戦争を「国民的戦争」として（さらに西・仏植民地国家の共同戦争としても）記念・記憶させようとの明白な意図が窺われる。さらに以上から、現地の戦闘（をさせる）当事者自身も（フランコも26年11月にRTCで「17年間続いた戦争」と言っていた）、その政府自身も「18年戦争」の認識を持っていたことは明らかである。¹¹

最後に、スペイン領の平定にとってはフランス領との境界画定が課題となった。本項冒頭に引用した26年6月初頭の文書でサンフルホは、「[西・仏の] 軍事協力と共同行動の結果としての政治的考慮によって、境界が修正されるのは不都合だとは思いません」とプリモに述べていた。おそらくこの示唆もあって、26年6月中旬～7月中旬の西仏パリ会談でスペイン代表は、フランス軍が占領していた境界地域（バヌゼルワルの一部）をフランス領とするこ

とを承認した。ただパリでの会談の時期に現地のフランス軍占領地では、スペイン軍部隊が可能な限りフランス軍にとって代わろうとしていた。そのための原住民「工作」もなされた。西仏会談では境界画定作業のための合同委員会設立が合意された。しかしこの委員会の活動がなかなか進まない間に、現地では全バヌゼルワルがスペイン領のものだとの主張が現れた(『リーフ通信』*El Telegrama del Rif*(TR)、メリーリヤ、27年6月)。とにかく、リーフ戦争中のそれぞれの軍の「貢献」また相互の牽制と力関係の結果によって、フランス領は若干拡大し、その分スペイン軍の平定地域は縮小することになった。¹²

1.2. 「原住民」の帰順と帰還

ゴデーは、自らの主導で遂行したモロッコ平定の経過を詳細に記した書を次の言葉で締め括った——「良い人々」を保護国家の事業に引きつけ、反乱者は力で制圧する、これが「原住民政策の簡明な原理」である。これはスペイン軍アフリカ派の以前からの戦略だった。既にフランコは「今日の敵は明日の味方」と言っていた(*RTC*創刊号、24年1月)。その後も、原住民を「有効な協力者」、「熱心な協力者」にすること、敗北者を協力者にすること(いずれも有力なアフリカ派軍人ガルシア・フィゲラス)、言ってみれば原住民を手なづけることはアフリカ派軍人の一貫した主張だった。それ故、原住民を帰順あるいは帰還させることが系統的にこころみられた。とくに各部族の有力者の帰順が目指された。「有力者が帰順すると、たいていはその部族全体が帰順する」、同部族や同支族の者はほとんど血縁で結ばれているから(カパス)だった。¹³

スペイン軍と保護国家への帰順は、周到にも、原住民の文化・慣習の枠内でなされるようにされた。ハリーファにアマーン *amān/amán* = 「保護」(保護国家は「許し」 *perdón* と解した)を乞うとの作法・形式が採られたのである。26年6月下旬、1 自称シャリーフが、「先の反乱」の「許し」を乞うためのリーフの全部族の有力者から成る代表团(50～70人から成るという)結成を提起した。代表团はまずテトゥワンのハリーファの許に、次いでマドリードのスペイン国王の許に行くことになった。サンフルホはこの報に喜んで、プリモに伝えた——これは「政治的に見て極めて重要である」、「リーフの帰順の現実」を立証するものであるし、さらにはスペインの町を原住民が訪問すれば、彼らは「我が国が秀でていることや我々の[モロッコの]文明化の目的」を理解し、かくして「原住民の精神に大なる作用」を及ぼせるからである。この提起はおそらくスペイン軍の工作によるものだろう。旅費の点から見てもこのように考えるのが妥当であろう(この訪問が実現したかどうか不詳)。27年4月にプリモの名で以下の声明が非帰順部族に発せられた——[保護国家] スペイン政府の長がこの地にまたやって来た、それは「諸君たちが平和のうちに安寧に生活し始めたのに、また闘おうと逆上しているのをあらためさせるためである。この平和は諸君たちの預言者が何回となく論しているものである。この闘いから諸君たちが得るものは破滅、苦しみ、死でしかない。アブドゥルカリームとその輩たちの悲惨な最期を忘れたのか」、「アッラーは諸君たちに加護をお与え

にならないので、諸君たちは敗れるに決まっているのだ」、「武器を引渡して許しを乞いなさい。そうすれば諸君たち自身とその家族の命を救うことができるし、また平和と自らの地の繁栄を望む良きムスリムとして振る舞うことができるだろう」。やや長く引用したが、「良きムスリム」として「許し」を乞わせるというイスラームの規範の枠内での作法の作意的利用がよく表れているからである。この作法の利用のためにはプリモの名（だけ）ではなくハリーファ名が適当で必要だったはずである。スペイン軍とその政府は作意的利用に慌ててしまい、それを忘れてしまったのだろうか。この1月後の27年5月には、高等弁務官とハリーファ当局が、西部地域で帰順した部族の全支族代表に「許し」を与えたとのIGITJの報告がある。この後の部族の帰順の際にもこの形式が採られたものと見てよい。RTCには、「逃亡者」が帰還している、我々は「敗者を懲罰したり侮辱したのではなく、許しの開かれた心でもって今この地にいるのだ」とのやはり誇らしげな論評が現れた（27年9月）。行政監察官のための『マニュアル』でも、ハリーファ政府の「許し」を得て帰還した「逃亡者」への対応について、監察官は「ハリーファ政府が過去の過ちを忘れていていること」を示すのがよいとの指針が提示された。¹⁴

既にリーフ戦争中にリーフ勢力の少なくないハルカの指導者がスペイン軍側に回っていた。1.1.で見たように、26年5月のリーフ勢力の政治体の瓦解後には、スペイン軍は「数か月前まで我々の敵だったアブドゥルカリームの闘士たちが我々の側で闘っている」ようにさせてしまった。この時期から、さらに多くのリーフ政府の元指導者やその軍事組織の元指導者たちもスペイン軍側に回り、スペイン植民地当局の支配下に入った。これは帰順というより寝返りと呼んでよいものである。その具体的様相は以下の通りである。リーフ政府元陸相が幽閉後にバヌワリャガールのカーイド（部族の原住民行政官）に／リーフ政府の元タンジャ代表がビリヤ・サンフルホ（平定後にスペイン植民地当局が建設した町、現在のアルホセイマ）のバーシャー（都市部の原住民行政官）に／アブドゥルカリームの弟（リーフ政府副首相）の元書記がスペイン軍側のハルカの隊長に／リーフ政府時代のカーイドがそのままカーイドに（多数）／リーフ政府時代のカーイドが原住民兵部隊の司令官に／リーフ勢力の元ハルカ指導者がスペイン軍側のハルカの隊長に（多数）／リーフ勢力の武器・弾薬調達担当者がスペイン軍の協力者に。かくして、26年にガルシア・フィゲラスは次のように言えた——「昨日は[スペイン軍の]闘いの相手だったこれらの人たちが、今日はその権威が原住民の前で強固になってよい、その人々なのである」。¹⁵

スペイン当局がリーフ政府時代の政治的・軍事的指導層やカーイドに照準を合わせた理由は明らかである。彼らを帰順させ寝返らせることによって抵抗者たちの志を砕くことと、彼らの組織能力を活用することである。元指導層にとってはスペイン軍支配の下で生存できる方法は他になかった。さらに、以前から、有力者が優勢な勢力や党派にしばしば「カメレオンの」(マテオ・ディエステの表現)¹⁶に乘換えるという環境がつくられていた(スペインによる支配はこれを利用し促進した)。それ故に、スペイン当局はリーフ政府時代の政治的・

軍事的指導層も懐柔できるとの自信を持っていた。

31年3月、「反乱の時期に原住民によって犯された罪」に恩赦を与えるとの勅令が出された。「犯罪者」が「許し」‘el amán o perdón’を得ているのがその必要条件とされた。¹⁷少なくとも形式的にでもスペインへの協力の意思を示せばもう「敵」ではない、反乱の「罪」はもう問わないとされたのである。1.1.1.で見たように、平定の「基本原理」とされた原住民の武装解除の終了が宣言されたのは30年9月だった。かくして、この2つの公的表明の時期（つまりメトロポリでの共和政宣言の直前）に、スペイン政府およびその軍が植民地モロッコの平定は完了したとみなしたと見てよい。

II.「原住民」統治

2.1.「原住民」統治の開始

(1) 26年12月、RTCで編集長フランコは、我々は軍事面ではうまくやった、これから大事なことは本格的な原住民統治を始めることだと力を込めて述べた——「攻勢的かつ賢明な軍事行動を展開すれば短期間のうちにこの地を征服できる」との我々の方針は的確だった、「今や組織するための、政治をやるための、実際に保護領の基礎と標柱を据えるための行動の領域に移ろうとしているのだ」、過去の我々の教訓[キューバやフィリピン、それにリーフ戦争までのモロッコでのことか]からして「武力で非常にうまく征服したとしても、政治的にうまくやらないと後にその成果は失われてしまう」（下線部原文大文字）。他方で、27年3月、メトロポリのモロッコ・植民地総局長ホルダーナの方は、植民地モロッコがメトロポリに富をもたらすようにするとの決意を語った——「我々の植民地が負担になるのではなく、富の宝庫となり、国庫に一息つかせるようになり、民間人の進取のころみに利益をもたらす広大な領域となるように」する。¹⁸

原住民統治の「礎石」の役割を担うとされたのは[植民地]行政監察官interventorである。フランコも本節冒頭で引用の論説で行政監察官の役割の重要性を強調した。RTCの他の論説も同様だった——「[スペイン領の]平和の確立と[原住民の]精神の平定は行政監察官の肩にかかっている」（26年12月）／「スペインの[モロッコでの]行動が成功するか失敗するかは行政監察官の肩にかかっている」（27年1月。以上いずれもTR編集長ロペーラ）。都市部には非軍人の行政監察官が配置されたが、部族地域には軍人の行政監察官が配置された。原住民統治の核心を成したのは後者である。後者の多くは元原住民諸部隊士官だった。行政監察局Oficina de Intervenciónが重要地点に設置され、行政監察官がその局長となった。行政監察局の他の役職もほぼ軍人で占められた（各監察局とも40人くらい）。この他に、ほぼ全部族に単数ないし複数の情報局 Oficina de Informaciónが設置された。情報局は行政監察局と結ばれ、その役職はやはり軍人で占められた（各情報局の人員は30人くらい）。28年1月

の行政監察局数は37、情報局数は72だったが、31年1月（1.2.で見たように平定完了期）にはそれぞれ45、36となった（全66部族）。交通・通信網の整備によって、この間に情報局が整理統合されたことがわかる。各行政監察局はテトウワン、ララーチェ（アルアライシュ）、メリーリャにあった3つの中央行政監察局の指導の下にあった。スペイン領全域の軍人の行政監察局を統括したのがIGITJ またInspección General de Intervención y Fuerzas Jalifianas (IGIFJ.27年にIGITJを再編・改称) である。¹⁹

ハリーファが保護領スペイン領の最高行政権力者とされながら、実際には高等弁務官がその地位にいたように、各部族＝現地原住民統治にあっても実際の行政権力者はカーイドではなく行政監察官だった。また、ハリーファ選任が実際にはスペイン政府の意向に基づいてなされたように、形式上はハリーファによるものとされていた各部族・支族のカーイドの任命と更迭も、実際にはスペイン軍の意向に基づいてなされた。以上の故に、「命令を出すのがカーイドであっても、屏風の裏には行政監察官がいるのだ」との簡明かつ直截な説明がなされた（後の32年の行政監察官向けの講義。これは27～31年に高等弁務官庁原住民部長だった前出のカパスらによるもの）。かくして、カーイド任命（あるいは更迭）のために各部族・支族の動向を調査・報告することが赴任した行政監察官の最初の仕事となった。さらに、情報網を組織して、常に原住民の動向を監視することが行政監察官の基本任務となった。情報収集のために、原住民諜報員の雇用、家系間・支族間の対立の利用、さらにはスペイン人医師を情報源として用いること（本項で後述）、またユダヤ系住民を情報提供者とすることが奨励された。軍人たる行政監察官は原住民兵力の編成・動員権限を持っていた（2.2で後述）。この原住民兵たちも有用な情報源として用いられた（『マニュアル』では、「部族における行政監察官のアンテナ」とされた）。情報収集のために、行政監察官にはアラビア語をはじめとした原住民の言語の知識や修得も要求された（フランコも前掲論説でこれを奨励）。行政監察官は集めた情報を毎日IGITJ /IGIFJに送ることになっていた。行政監察局はしばしば留置場も付設していた。²⁰

（2）26年10月、IGITJは各行政監察官に以下の調査を命じた——各部族の領域と生存手段（政治的・軍事的領域、定住民か移動民か、人口、家族数、有力者、道路、集落、市場、生産物、商工業、漁業、森林、開発可能資源）／部族の社会生活（カーイド、同族集団の会合jamā'aの構成、言語（アラビア語化しているか、ベルベル語系か）、隣接部族との関係）／土地の所有・使用形態・相続方法、未耕地、牧草地／法制・慣習（法官qāḍīはいるか、慣習法、女性（妻）の権利、親類の権利）／犯罪（殺人・窃盗に関する掟、報復（「血の決済」））／宗教（イスラーム化されているか、クルアーン教育、宗教儀式の場、教団、宗教行事、宗教者の権威）／税（課税権限、納税義務、税の使用目的、課税への抵抗、科料制度）／戦闘（ハルカの成員（免除者）、指揮者、戦闘方法、村落の防衛義務、家系間の同盟関係、戦争資金）。²¹

見られる通り、この調査は、「[スペイン領の] 全面的占領のこの最初の時期」（『マニュアル』）に原住民の生活状況のほぼ全般的把握を目指したものだった。各行政監察官は26

年末頃から調査を始めた。29年に、IGIFJはほぼ全地域での調査結果を刊行した(3つの *Vademécum*。これは行政監察官必携の『便覧』の意)。この後も各年の新たなデータを加えて、31年版まで *Vademécum* が刊行された。ここでは、基本データとして、この調査に基づく原住民人口のみを示しておく(29,30,31年のそれぞれの版で大きな変化はないので、「平定完了期」の31年版の数字を示す。14歳での区分の意味は後出)。

14歳以上の人口 男152,170 (48.1%) (a) 女164,136 (51.9%) (b) (b) - (a) = 11,966

14歳未満の人口 男137,142 (51.8%) (c) 女127,824 (48.2%) (d)

総計 581.272

(b) - (a) の数字に注目すべきである。一般に男児を好む原住民の慣習(それは(c)、(d)からも分かる)からすると、(b) - (a) の数字はさらに際立つ。そこで地域毎の14歳以上の人口を見てみよう。

地域	男 (e)	女 (f)	(f) - (e)
東部	44,543	49,091	4,548
リーフ	28,080	34,289	6,209
グマーラ・シェフシャワン	27,151	28,123	972
東イバーラ	23,297	23,855	558
西イバーラ	29,099	28,788	-311

リーフ次いで東部で (f) - (e) の数字が高いことがわかる。この両地域はリーフ戦争で原住民の抵抗が最も激しかったところである。以上から、(b) - (a) ((f) - (e)) はリーフ戦争による成人男性の死亡と「逃亡」の一部を表すものと見て間違いないだろう(上記5地域の区分、さらには部族・支族の区分や境界区分が、原住民統治を「政治的にうまくや」るために、スペイン植民地行政当局によって恣意的になされたことも指摘しておくべきである)²²

上記の調査に基づいて、あるいはこの調査事業の一環として、以下の原住民統治政策が実施・導入された。それらを順に見ていこう。

身分証明書の発行 身分証明書の発行・携帯義務は以前からスペイン軍占領地の一部で導入されていた。27年7月と29年12月のハリーフア令で原住民に以下のことが義務づけられた——14歳以上の者(家長でない女性は除く)は身分証明書 *Tarjeta de Identidad/ nekua* を携帯すること、これには写真を貼付し、この証明書を持たないその家の住人の一覧(女性を含む)を記すこと、2年間有効、発行手数料を徴収(1年目は発行のために、2年目は更新のために毎年徴収。発行手続きが遅れた場合にはその期間に応じて追徴)、発行手続きをしなかった者には強制執行と相応の罰、家長でない女性は居住者証 *Cédula de Vecindad* (写真貼付なし) を携帯する、家長は他に毎年その家の住人の年齢・職業・収入・納税額・未婚か既婚かを記した書類を提出する。この措置の意図は明らかである。つまり原住民の動向把握と移動

規制、住民台帳作成、それに発行手数料収入の3重の効果を狙ったものである。既に見た人口把握はこの措置によって可能となった。写真代（ほとんどの原住民は自ら写真を用意できなかった）を含む発行手数料収入は30年に全税収の6.4%、31年に5.5%となった。原住民がこの措置にどのように対応したかはわからない。2度もハリーファ令が出されたことは、原住民が直ちには応じなかったことによるのかもしれない。28年の人口比の発行手数料収入額が部族によってかなり異なることはそれを示すものだろう。30年10月には賃金支払いの際にも身分証明書の提示が必要とされるようになった。これも身分証明書発行・携帯の強制策である。原住民の動向把握は以上に限られなかった。行政監察局は各原住民の個票を作成・保管した。個票には身分証明書と同じ正面の写真の他に横顔の写真が貼られた（つまり写真は全部で3枚必要とされた）ほか、スペイン国家・軍に対する態度（良、悪、通常）、友人や「血の決済」の関係、さらには身体的特徴（髪、耳、鼻、口、ひげ、皮膚の色）が記載された。そればかりでなく、少なくとも一部では27年から、おそらく28年以降には全面的に、身分証明書に（早くも!）指紋も印されるようになった。指紋導入のために、27年に3つの中央行政監察局にそれぞれ人体測定部が設置された。スペイン植民地行政当局が細部にまでわたる身体的特徴の把握に努めたのは、日常的な個々の原住民の動向監視のためだけでなく、その逃亡や反乱に備えるため、また原住民兵部隊への入隊（2.2.で後述）の際の厳重な身元確認のためだったと見てよいだろう。²³

課税 「ある地の平定領域を増やしても、それが保護国家の負担を増やすことになったら、どんな意味があるのか」、モロッコの主要な直接税である農産・畜産税を払わせることが必要なのだ（フランコ、RTC、28年2月）。27年1月のハリーファ令で農産・畜産税Tartībの課税が開始された。農産・畜産税は耕地面積と畜数に応じて課税された。この農産・畜産税は、29年にはハリーファ政府の税収の第1位となり、30年には全税収の55.3%、31年には56.2%を占める安定財源となった。この課税に対しては少なからぬ抵抗があった。税率が下げられ、また各戸申告制から同族集団毎の集団申告制に変えられたことがそれをよく示している。
スーク市場での物品取引に課される市場税も農産・畜産税に次ぐ税源となった（30年に全税収の23.7%、31年に18.6%）。かくして行政監察局は市場を統制下に置くことに努めた。そのために行政監察局が市場の近くに設置されたり、あるいは行政監察局の近くに新市場がつくられたりした。もちろんそれは課税と商業の管理・統制のためだけではなく、情報交換や政治的行為など市場に集う原住民の動向を監視するためでもあった（市場の建設は「今日では経済面でよりも政治面で非常に重要な事業」である、テトゥワン中央行政監察局の情勢報告、26年12月）。²⁴

土地譲渡 リーフ戦争中の25年に出された行政監察官のための『摘要』には既に、「我々は原住民の法規を尊重しなければならない。しかし、・・・土地所有が人々の取引の対象となるように、つまり確実に担保を付けて売買されるようにしなければならない」とあった。『マニュアル』でも、土地の所有権を文書で確認させること、文書がなければ「土地を失う

かもしれないことを全原住民に納得させること」が指示された。スペイン植民地行政当局は原住民が耕作・利用していた土地の私有化を促進しようとしたのである。この時期に最有力のアフリカ植民主義派組織だったスペイン・アフリカ連盟Liga Africanista Españolaの機関誌『スペイン・アフリカ雑誌』*Revista Hispano-Africana*(*RHA*)にも、「ハリーファ政府所有地を原住民あるいはヨーロッパ人の小耕地に分割するのがよい」との論説が現れた(27年12月。この論者は、大耕地にすると耕作者は労働者となる、彼らは反抗的になるかもしれないから、「政治的観点から見て」大経営は良くないと付加するのを忘れなかった)。行政監察官による調査を受けて土地の分類がなされ、ハリーファ令で土地譲渡についての一般的方針が示されたのは30年10月だった。スペイン領の土地は以下の4つに分類された。①公共用土地(道路、港湾など)、②ハリーファ政府や公的団体に属するが、公的事業や資源活用のための土地、③部族の共同地、死手地、ハブー(ワクフ)など、④ハリーファ政府や公的団体に属する土地、個人の土地。以上のうち①と②はそれが活用されている間には譲渡不可、③はハリーファ政府が許可すれば譲渡可、④は譲渡可とされた。²⁵

土地譲渡の主目的はスペイン人の入植だった(32年にカパスらは、「行政監察官の役割は、何よりもまず、ヨーロッパ人が入植可能な土地の台帳作成である」と断言した)。スペイン領でメトロポリの人間を増やすことは、数の論理からしてもメトロポリの統治をより安定させるはずだった。北部モロッコへの農業移民は保護領設定前から奨励されていた。保護領設定後の14年からは、スペイン植民会社Compañía Española de Colonizaciónの手によって主にメリーリャ周辺で入植事業がおこなわれた。「全面的制圧」後に、スペイン植民地行政当局はこれを他地域にも広げようとした。26年12月には、西イバーラ地域にスペイン国家が所有する土地(保護領設定前にスルターンから譲渡されたもの)をスペイン人農民に譲渡ないし賃貸するとの勅令が出された。翌27年には、やはり西イバーラ地域でいくつかの農地の競売が公示された。これらにはスペイン国家所有地の他にハリーファ政府の土地も含まれていた。やはり27年には、ハリーファ政府があるハブーの土地の売却を承認した。スペイン植民会社はリーフの「反乱者」、「逃亡者」から没収された土地を購入した。上掲の30年の一般的方針が示される前に既に土地譲渡が進んでいたのである。*RTC*はスペイン領を「新たなオラン」にしようとのキャンペーンを張り(オランはアルジェリア西部のスペイン人農業移民が多い地域)、*RHA*もこれに協力した。主にアンダルシア、バレンシア、ムルシアの農民の入植が意図された。31年版の『便覧』によると、31年7月までに入植のための140件の土地移転があった。そのほぼ半数(71件)は西イバーラ地域においてである。また全譲渡面積9,904haのうち9,451haは西イバーラ地域のものである。西イバーラではいくつかの大きな農地が入植対象とされたことが以上の主な理由である。西イバーラでは購入が圧倒的に多いが、他では賃貸が多い。ほとんどの被譲渡者はスペイン人である(129件)。被譲渡者がモロッコ人名義のものが3件、農業開発会社Compañía Agrícolaのものが7件である(残りの1件は農業試験場)。明記されている元の土地所有者は、スペイン国家3、ハリーファ政

府1、ハブー3、同族集団2、個人47である。本稿の対象時期にどのくらいの数のスペイン人が耕作者あるいは（主に農業開発会社の農地で）農業労働者となったのかについては確たるデータを示せない。26～30年のスペイン人のスペイン領への移民は増えていない（年平均5,503人。それ以前で最多の14～15年の年平均11,535人の約半分）。スペイン植民地当局の奨励にもかかわらず、かなりの規模の入植が実現したのではなかったと言ってよい（20年代後半のヨーロッパ経済復興によるメトロポリでの労働力需要増大が大きく関係した）。²⁶

医療と衛生 植民地化における医療の役割も20世紀初頭のアフリカニスモ高揚の時期から強く意識されていた。「全面的制圧」がほぼ達成されると、医療と衛生の事業は直ちに実行に移された——「医師は、モロッコのような原初的な文明の国にあっては比類なき重要人物である」（*TR*、26年12月）／「行政監察官のものすごい政治的武器は医者と技術者である」（ガルシア・フィゲラス、26年）。行政監察官が部族内各地を訪問する際には常に医師が同行した。医師は「ヨーロッパ文明」の優秀性を目の当たりに見せうる、原住民と（女性とも）密接に接触できる（それ故に情報も得られる）という2点においてスペインのモロッコでのプレゼンスを生じる形で正当化しうる存在だった（1名のスペイン人女性医師も赴任した）。各地に診療所（ほぼ各部族に1か所）・家畜診療所が設立され、消毒・害虫駆除隊が組織され、水質検査が実施され、また衛生キャンペーン（天然痘、梅毒、マラリア、狂犬病などの予防のための接種）が展開された。30年になると、いくつかの地点に化学実験所、薬剤保管所、注射液センターが設置された。*RTC*は医療・衛生事業の成果をしばしば誇りをもって伝えた。次はその初期の論説の1つである——「モーロ人は、帰順するとすぐ余りに多くの信頼をもって医者を迎え、不可能なことも医者に期待する」（26年9月、軍医）。しかし、医療・衛生事業は原住民のためではなかった。それは「ヨーロッパ人」が原住民と接触する際の「危険」を避けるためでもあった（25～26年に天然痘によって、テトゥワンだけで62人の「ヨーロッパ人」が死亡した）。さらに、上掲の一連の病気のメトロポリへの伝染を防ぐためでもあった。それ故に、スペイン人士官が原住民兵と接触する場であるハリーファ軍では伝染病（とくにマラリア）予防措置がとくに厳しく採られた。また、バヌワリャガールの行政監察局でマラリア感染者と腸障害患者が発生したので、この監察局は移転となった（27年）。医療・衛生事業を効果的に展開し、また原住民に「文明」を教えるために、カデイス大学医学部にモロッコ人医療補助員養成コースが創設され（28年）、またIGIFJ自身が同補助員の養成を始めた（30年）。²⁷

教育 在住スペイン人子弟のための学校の他に、原住民初等教育は、①スペイン・アラビア学校、②クルアーン学校に分けられた。①では、スペイン人教師がアラビア語を話す原住民教員に補佐されて教鞭をとった。31年の児童数は、①401、②25,749である。圧倒的多数の原住民子弟がクルアーン学校で初等教育を受け（ようとし）たことは明らかである（②の総数は2,605。つまりほとんどが児童数10人程度の小規模なものだった）。31年に、①の3校は児童数不足のために、1校は教員不足のために閉鎖となった（それまでの①の総数は30。

31年以前に1校が閉鎖されていた)。スペイン植民地行政当局は「ヨーロッパ」式教育およびスペイン語教育を普及することができなかったと言ってよいだろう。30年11月になって「初等教育規則」が公布された。それによって原住民初等教育は、スペイン・アラビア学校、スペイン・ベルベル学校、スペイン・ユダヤ系学校の3種類に分けられた(いずれも無償)。「民族」‘*raza*’によるこの区分は、行政監察局によるこの間のエスニシティ調査を反映させたものと見てよい(31年の『便覧』に「エスニシティ」‘*Etnografia*’の章が初めて現れる)。この規則では、ムスリムは、女兒の学校教育を望まなければ女兒を学校に通わせなくともよいとされた。また上掲の全ての学校でスペイン語教育が導入された。この初等教育規則は本稿の対象期間には適用・実施されなかったようである²⁸。

インフラ整備と公共事業 やはり「ヨーロッパ文明」を見せる、「富の宝庫」(前出ホルダーナの言)とする、原住民に仕事を与える(失業対策)、スペイン軍と原住民兵部隊の移動と食糧確保、原住民の宗教・慣習の尊重の意向を見せる、以上の目的のためにとくに30～31年に多くの公共事業が実施された。それらは道路・鉄道・電話網・港湾・橋梁・灯台・居住地・屠殺場・メスキータ・その他の公共施設の建設や、導水・灌漑事業などである。これは、28年5月にスペイン政府がハリーフア政府に公共事業のための巨額の借款(総額8千万ペセータ)を供与したことによる。この措置にはとくに戦闘終了による原住民の失業状態(戦闘員としてだけでなく、在モロッコ・スペイン軍のための労働需要が激減した)を緩和する意図があった。IGITJは、「政治状況から見て」原住民に「生計の手段」を与えることが必要だと高等弁務官に要請した(26年6月)。TRも、スペイン軍の一部帰還によるメリーリャの「労働危機」の解決を訴えた(27年3月)。TR編集長のロペーラはRTCで、リーフでの公共事業には軍事的、政治的(「仕事のない労働者を反乱者から奪い取る」)、経済的の3つの意味があると論じた(27年4月)。30年にルイス・アルベニス(「スペイン保護領の原住民家族のほとんど90%が公共事業の仕事での収入で暮らして来ていると言ってよい」とまで述べた(これは誇張だろう))。以上の故もあって、RTCは前述の諸々の公共事業を自らの事業であるかのようにやはり誇らしげに報じた。²⁹

鉱産物の採掘 鉄鉱石、銅鉱石、鉛・亜鉛鉱石、輝安鉱、石炭の試掘・採掘がおこなわれた(全26か所)。『便覧』によると、これらの資源の採掘権を得たのは、2か所(うち1か所は西・仏合弁企業による)を除いてすべてスペイン人(名義)かスペイン企業だった。以前から採掘がおこなわれていた東部地域の鉄鉱石と鉛鉱石の産出量は本稿の対象時期に急増した。しかし、新たに採掘が開始された地域の産出量は多くはなかったと推測される(『便覧』に産出量あるいは産出額の記載なし)。³⁰

以上の他に、既述の灌漑事業や農業試験場・農業学校の設立によって原住民の農業生産力の向上が目指された。RHAはスペインのおかげでリーフの農業が進歩したと自讃した(28年)が、その確証は難しい³¹。

保護領の制度上、原住民統治の資金はハリーフア政府の財政によることになっていた。し

かし税収を主財源とするハリーファ政府の収入でその支出を賄うことは全く不可能だった。ハリーファ政府の歳入と歳出を形式上で均衡ならしめたのはスペイン政府の借款だった。ハリーファ政府の歳入におけるスペイン政府の借款の額は、27～30年に67%（27年）～64%（30年）を占めた（ハリーファ政府財政の大赤字の要因（というより秘密）は原住民兵力維持の費用にあった。このことについては2.2.で後述）。³²

（3）以上の原住民統治の教義上の証を立てるかのように、この期間のRTCとRHAには、「文明化の使命」、「文明化のための行動」、「文明化事業」などの言葉づかいが頻出する。もちろん、自らの側（のみ）が文明を持つとして、自らの行動をまず自らに、それに他（原住民とメトロポリ）にも正当化する、あるいは納得させる認識枠組みの表明でありキャンペーンだった。このための行動は、モロッコ現地での事業だけでなく、一部の原住民にメトロポリの「文明」の現地を見せることも含んでいた。1.2.で見た「許し」を乞うためのリーフ代表団のメトロポリ訪問計画についてのサンフルホの言はこの企図を直裁に示したものである。28年には原住民有力者のグラナダ訪問があった。29～30年のセビーリャとバルセローナの2博覧会にスペイン政府の費用で原住民青年を招待したのも「保護国家の力とその経済的・文化的・社会的価値」（RTC）をわからせるためだった（2博覧会については後に再論）。他方で「文明化の使命」論は、メトロポリの人々を「文明国民」として同化しようとするものだった。この「使命」論に対しては、20世紀初頭のアフリカニスム高揚の時期から「国内再建」論者の有力な対論的主張があった。リーフ戦争期には、「モロッコでの冒険」は「国の富」を浪費する、スペインの中の貧困状態を見れば「文明化の使命」のためにモロッコに行くのは「皮肉なこと」だとの批判（スペイン社会主義労働者党）や、モロッコの「文明化」よりもスペインの「文明化」をとの意見（新聞『自由』*La Libertad*の意見聴取欄、21年8月）が表明された。しかし、モロッコ平定期のプリモ体制の下では、「使命」論が優位となるのに反比例してこれらの批判は公的議論から除かれてしまった。³³

それでは、軍事力によって制圧された後に、原住民は「文明」に同化させられようとしたのだろうか。かのロベールはRTCで説いた——「今や、我々は[原住民の]精神を平定し、政治的統一を欠いている地を組織する事業を続けなければならない」／アラブ化・イスラーム化している部族・村落とそうでない部族・村落の状況をよく検討すること、そうすると「武装による平定に続くべき望ましい精神的平定がもたらされるだろう」。ロベールは、「精神的平定」においても、「保護国家の威信」、「全てにおいて我々が最強であることを[原住民に]認めさせる」ことを付け加えるのを忘れなかった（以上、26年8月、9月）。後にカパスらも、行政監察官は「[原住民の]精神の平定者」である、しかし（あるいはそれ故に）、原住民に弱さや無知を見せないように強調した（「寛容な姿勢を示すのは懲罰の後にせよ」）。³⁴「精神的平定」とはヨーロッパ「文明」を受け入れ（させ）ることなのだろうか。それとまたんに非軍事的手段（「威信」や「懲罰」など）によってスペイン国家・軍の統治を承認かつ納得させることなのだろうか。本稿での結論を先に述べると、この時期に言われた「精神的平定」

とはヨーロッパ「文明」への積極的な同化政策ではなかった。また、たんなる非軍事の方策のことでもなかった。むしろ、原住民に植民地支配あるいは被支配の実態を可能なかぎり可視化また自覚化させないために、原住民の文化・慣習を積極的に維持し利用しようとするものだった。

再びロベラの言うところを聞こう——「同化的な直接統治の体制は、それをまたやろうとしても、何にも増して見事に失敗した」、スペイン領自身と世界の他の植民地統治の経験からして、植民地国家による直接統治が原住民に「多くの疑心の理由」と「不満の種」を与えてしまったからである（*RTC*、27年2月）。カパスらの行政監察官への忠言も聞こう——「原住民の心をよく知り、その心の中に入り込み、それを我がものとせられたい」／「[原住民の] 宗教に関することには手を出さないこと」／「最良のモロッコ政策は [原住民の] 精神・道徳の諸原理を尊重しようとすることである」。以上からわかることは、ヨーロッパ「文明」への同化ではなく、むしろ原住民をして自らの「精神・道徳」から抜け出させないようにする志向である。この「一種の旧慣温存主義inmovilismoの戦略」（マテオ・ディエステ）は何もスペイン植民地行政当局の独得の統治方法ではない。「[原住民の] 伝統の尊重」はリヨテを代表とするフランス植民地統治者の基本戦略だった。スペインの植民地主義者もそれを学んだ（模倣した）のである。1.2.で見た「良きムスリム」にアマーンを乞わせるとのやり方はこの戦略の適用だったのである。³⁵

「旧慣温存政策」は、この時期にはさらに、たんに「温存」ではなく、イスラームに明確に照準を合わせて、それを植民地主義に取り込む戦略にまで発展した。ガルシーア・フィゲラスはこの戦略の早くからの唱道者だった——「ソビエト主義や目覚めた黄色人種が西洋文明に対抗する恐ろしい敵として立ち上がっている時に、西洋文明はイスラームの人々が3億人もいる現実を目をつむることはできない。イスラームをこれらの敵と共にあるようにしてしまうのか、それともこれらの敵に対抗させるようにするのか、つまるところ、問題の本質はここにある」（*RTC*、26年7月）。ムスリムを革命運動と民族運動に向わせないために取り込もうとの戦略である。それ故に、*RTC*（26年9月）の別の論者が挙げた「これからの我々の原住民政策の3つの基本点」のほぼ全てが旧慣温存政策とイスラームに関することだった。この論者は「原住民の愛郷主義patriotismoの称揚」と「汎アラブ主義の称揚」を挙げたのである（もう1つの称揚については後述）。モロッコ民族運動が新たな展開を見せた30年には、*RHA*の論説が主張した——第3インターナショナルの活動が北アフリカで広まっている、彼らは「植民地からメトロポリに革命をもたらすのだ」と言っている、「イスラームが強力ならば、赤の危険は恐るべきものとはならないだろう」、「個人主義が強く、宗教的精神が根付いており、伝統主義があり、さらに物質的進歩に適合しやすいことから、モロッコは赤の危険に対する強力な障壁となりうる」。それ故に、むしろイスラーム奨励策が採られることになったのである。既述のようにロベラがアラブ化・イスラーム化している部族・村落かどうかをよく調査するように説いたのは、このことを念頭に置いてのことであつた。こ

の戦略のためには、イスラームが宗教・慣習の枠内のみに留まっているように監視ないし統制しなければならなかった。20年代に開発されたこの戦略は、40年代までつまりメトロポリの内戦中から初期のフランコ政権の時期まで続けられることになる。³⁶

上の戦略のもとで、原住民とのつき合い方について行政監察官に様々な指示が出された——原住民に対して「公的にはけっして強制的または懲罰的な行動をとらないようにすること」、「原住民当局が自ら発意するようにすること」、「我々の計画に[原住民が]受動的に従うのではけっして十分ではない」、「ムスリムとしての意識を痛く傷つける重大な危険を絶対に避けること」、同族集団に責任を負わせると良い結果を得られる（以上、『マニュアル』）／「高慢と蔑視ほど原住民を傷つけるものはない」（カパスら）／「個人的に原住民と親しくなっても、スペインのやり方に原住民が憎悪を抱くようになったら何にもならない」（カパス）。とくに注意を払うべきこととされたのは「ヨーロッパ人男性と原住民女性との関係」である——「周知の通り、この問題は原住民の間に強度の怨恨を生じさせるからである」（『マニュアル』）。「屏風の裏には行政監察官がいる」（本稿前出）のだが、表面上は原住民を慰撫に扱えということである。また、原住民に接近しても深入りはするなととれる。³⁷

さらに、上の戦略と関連して様々な原住民論・モーロ人論が現れた。まず、兄弟姉妹あるいは友人論——スペインは「幼な子であるモロッコの長女である」（*RTC*、26年9月、前掲の「3つの基本点」の論者）／原住民を「兄弟[しかし、弟のこと]と見なければならない」（*RTC*、31年3月）／「モーロ人を劣った人々と見ないで、友人として、もっとはつきり言えば弟として見て、原住民の心を理解すること」（カパス）。それでも、モロッコ人を「年下の人々」あるいは「弟」と見て、我々は「長兄」の役割を果たすべきだとしながら、スペイン人とモロッコ人は「兄弟なのに誤って敵となってしまった保護民と被保護民」（ガルシア・フィゲラス）とまで言われると、この論の意図もほの見えてしまう。次に、これを発展させて同民族・同祖論——「隣人としても民族 *la raza* としても固い絆でスペインと結びついている」モロッコ（前掲「3つの基本点」の論者）／「海峡の向こう側の北アフリカの沿岸には、我々の言語は話さないが、数世紀にわたって融合して来たので、我々と非常によく似た人々が住んでいる」（*RHA*、29年4月）／「モロッコとスペインは同じ地理的単位の半分半分である。イベリアの一部として見なければモロッコの地理は理解できない」（同、31年3-4月）。さらにここから歴史を溯って、スペイン＝アラブ＝イスラーム論——「アラブ・スペインの伝統、スペインのイスラーム文化の再興、アラブ・アンダルース主義、以上の称揚」（「3つの基本点」の論者）／「往時の我がアラブ・スペインのイスラームの栄光を想起させながら、明確にアンダルースを押し出して我々の保護領の行動の方針とする」（*RHA*、28年3-4月）／「「アラブ・スペイン」の名で知られているムスリムのアンダルースの王国の面影を再興する政策以外に可能な原住民政策はない」、野蛮なベルベルとは異なって「モーロ人はアンダルースのモロッコあるいはアラブ化されたモロッコとして知られているものを形成しているのである」（傍点原文イタリック体。前掲「半分半分」の論者。ここでは、アラブ化されているか否かが決

定的区分点とされるに至った)。³⁸

以上のうち同民族・同祖論やスペイン＝アラブ＝イスラーム論が全く当を得ていないとはもちろん言えない。しかし、これらの論がスペイン国家のモロッコでのプレゼンスそれに上掲の旧慣温存政策とイスラーム取り込み戦略を正当化するために現れてきたことは明らかであろう。何よりも今まで見てきた平定のやり方と原住民統治政策がこのことを雄弁に示している（＝これらの論をほとんど裏切っている）。テトゥワンの行政監察局の軍人は公にそれを語ってしまった——モロー人は「我々より劣った人たちではない」が「最も遅れた人たち」、「我々に比べて非常に遅れた人たちである」(RTC、27年11月)。さらに、スペイン軍と植民地行政当局は原住民と「ヨーロッパ人」(実際にはほとんどスペイン人)を、また原住民兵と「ヨーロッパ兵」をそれぞれ対置させることを日常的におこなっていた。この言葉づかい＝認識枠組みについての公的説明はないようだ。この無意識的(いや意識的か)範疇分けの理由(秘密)にさらに迫っていかなければならない。そのためにモロッコからしばらく離れて、アフリカの他のスペイン植民地である西アフリカの赤道ギニアでの原住民統治のやり方を見よう。赤道ギニアは、北部モロッコとほぼ同時期(28年)にスペイン軍の完全占領の下に置かれたからである。西アフリカ植民地の権益を代表した『アフリカとアメリカ』誌 *Africa y América* (AA.バルセローナ)の1論評は明言した——「文明化する人々と、文明化される人々」、前者は「ヨーロッパ人」である。AAも深く関わって28年にバルセローナに設立された植民地協会 *Instituto Colonial* はやはりとくに西アフリカ植民地権益を代表したが、その協会員も人種主義丸出しだった——「黒人は人間の中で最劣等に位置する」、「原住民の黒人 *los negros aborígenes* は十全な生活ができない。優秀な人種 *raza* と接触しても、文明を感知することも理解することもせず、文明とは全くかけ離れた状態にいるからである」(AA、29年4-5月)。29～30年のセビーリャのイベロ・アメリカ博覧会では赤道ギニアのパビリオンが設営され、動物などの他に「約50人の原住民」が「陳列」された(同博覧会ではモロッコのパビリオンも設営された。入口には「モロー人兵士」が立った。モロッコの建築や工芸品・絵画が陳列され、舞楽も催された。しかしモロー人が「陳列」されたことはないようだ)。上掲の植民地協会は、29年開催のバルセローナ万国博覧会と併行して「スペイン植民地博覧会」の開催を提案した。この提案でも「目玉の一つ」としてやはり西アフリカ植民地の「原住民の小集団」を展示する計画があった。それは「エスニシティの生の本当のスタジオ」となるだろうとされた(28年)。独自の植民地博覧会開催が難しかったので、29年には、万国博覧会に西アフリカ植民地の特別パビリオンを設営してほしいとの要望がプリモ首相宛に出された。しかしこれも実現には至らなかった(とはいえ、万国博覧会の際にバルセローナ市内では、セネガル人の「エキゾチックショー」またアルジェリア人の「展示」の興業があった)。AAと植民地協会は植民地の富の収奪論も丸出しだった。その典型は植民地協会開所式での理事長挨拶に見られる——「植民地を多く持てば持つほどその国は豊かで強力となります。これらの植民地から重要な富を獲得することができて、メトロポリの力が増大する

からであります」。西アフリカ植民地を経て再びモロッコ植民地に立ち戻ってみると、当地での原住民と「ヨーロッパ人」の対置の常用の秘密は半ば解けたのではないか。つまり、兄弟姉妹論や同民族・同祖論がときに現れたとしても、モロッコでも、人種主義を深く帯びつつ、前者は「文明化される [べき] 人々」、後者は「文明化する人々」のことだったのである。モロッコでは、旧慣温存政策とイスラーム取り込み戦略のためにそれを丸出しに出来なかった。しかしまた、モロッコ植民地で原住民と「ヨーロッパ人」をばつさり切り分けられなかったことには、隣接に伴うイベリア半島とモロッコの過去の一部共有という複雑だが歴然とした要素も見なければならない。主に1492年にイベリア半島から追放された人々の末裔とされたユダヤ系住民も上記の要素の1つである。彼らはモーロ人とは別種の住民として扱われ、独自のコミュニティを許された（それで管理された）。³⁹

30年元日のTRの論説は、去った29年は「保護領の活動の様々な形態が検討された」「準備の年」だった、来たる30年は「執行の年」となるだろうと予言した。30年（頃）は原住民統治においてもその本格的開始の時期と意識されていた。⁴⁰

2.2. 「原住民」兵

原住民諸兵力に大きく依拠して平定作戦が展開されたことを1.1.で見た。その主な意図は、メトロポリの兵力の節約、以前の抵抗者を自らの平定兵力の前面に立てることによる未服従者への効果、これらの元抵抗者の軍事組織能力の活用、総じて将来の植民地軍の準備、以上の4点だったと言える。以上のことは、原住民統治開始期において「最も安価で政治的に良い方策」（サンフルホ。1.1.で引用）となるはずだった。26年7月に、アルアライシュのハルカの総司令官から次の提起がなされた——ハルカは現在の形態でも「多大な便宜」を有しているが、騎馬隊を備えるなどしてその能力をもっと向上させるのがよい [=一部を恒常的兵力とするのがよい]、各部族にある警備隊Idalaに士官をつけるのがよい、そうすれば「平時には村落の中で警察の役割を果たせ、戦時にはハリーファ軍やハルカに代わってそれぞれの地で動員できる」、警備隊の維持費は各部族が負担する（「植民地軍の発展」、RTC）。リーフ戦争中の25年に、スペイン軍の一部である正規原住民兵部隊Fuerzas Regulares Indígenas (FRI.通称レグラールス)を除いて、ハリーファ軍maḥallaと「補助的原住民諸兵力」（ハルカ、ハリーファ警察隊makhazni、警備隊）の各原住民兵力は新設のIGITJの監督下に置かれた。公式の平定宣言後の27年12月の原住民諸兵力再編令は補助的原住民諸兵力の範疇を廃止し、ハルカを解体した。ハルカの一部はハリーファ警察隊に統合された。ハルカに代わって、前掲の提起をも受けて、各部族に警備隊が恒常的に組織されることになった。平定が進んだのでハルカのような臨時的戦闘集団の役割は終わった、各部族の治安維持のための恒常的準軍事力が必要だと判断されたのだろう（しかし、一部のハルカは少なくとも29年まで残っていた）。この再編令によって、行政監察官は、ハリーファ政府の軍事力であるハリーファ軍

と準軍事力であるハリーファ警察隊（これらはアスカリ‘askari/askariと呼ばれた）の部族内での監督権・動員権を持つことになった。また警備隊の事実上の動員権も有した（同再編令によって、2.1.(1) で見た行政監察局と情報局の役割が定められた）。⁴¹

平均すると各行政監察局には56人、各情報局には36人のアスカリが配置された（29年）。その他に、主要地点にアスカリの駐屯地があった。公式に明らかにされた第2共和政成立直前のFRIを含めた原住民兵力は次の通りである。

FRI 12,770（このうちほぼ3分の2が原住民兵）

ハリーファ軍 8,738

ハリーファ警察隊 12,753 （ハリーファ親衛隊175を含む）

原住民山岳中隊（冬期の「雪の部隊」） 173

以上から、この時期の原住民兵総数は約3万人だったことがわかる。リーフ戦争中の兵力数と比べると、FRIはリーフ戦争中の最大時（14,405という公式数字がある）より11%減、ハリーファ軍は約1.5倍、ハリーファ警察隊は激増している。後2者には以前のハルカの人員が一部吸収されたからだろう。上の約3万人という数字は2.1.で見た14歳以上の原住民男性数152,170の約20%に当たる。政治的・軍事的にはもちろん経済的・社会的にも原住民の生活における兵士の意味あるいは兵士となる意味がこのことから推し測れる。つまり、以前からの植民地モロッコの貧困、それに加えてリーフ戦争後の原住民の生活不安定が原住民兵リクルートの基本条件だった。⁴²

上記の条件の故に、以前からの原住民兵徴募のためのスペイン軍の諸活動に加えて、平定期には、市場での直接かつ公然とした徴募活動もおこなわれるようになった。『マニュアル』では、アスカリにはできたら元FRI隊員がよい、また「その大多数はその部族の者でないようにするのがよい」とされた。前者に関しては、スペイン軍の下で鍛えられた規律と武器操作能力が評価され期待されたのだろう。後者について、後にカパスは語った——各行政監察局には少数のその部族出身と多数の他部族（とくにフランス領）出身のハリーファ警察隊員がいる、他部族出身者は「部族や支族が全体として反乱を起こすときには」その部族出身者に同調しないし、さらには「部族の策略を監視している」。⁴³

全原住民兵力における「モーロ人士官」は、リーフ戦争中の21～27年には71～89人だった（うちFRIは52～80人）。28～31年にそれは90～100人に増えている。28～31年のモーロ人士官の内訳を見ると、FRIが73～85人、ハリーファ軍が6～8人、ハリーファ警察隊が2～3人、他（前掲の山岳中隊、それに残存していたハルカや警備隊と思われる）が2～7人である。平定期にモーロ人士官が増えたのは、FRIのモーロ人士官がリーフ戦争中の最大数をほぼ維持したことによる。これは、スペイン軍の一部であるFRIを原住民兵力の核とし、そこで原住民士官を育てようとのスペイン軍の意向の表れと見てよい。しかし、モーロ人士官の登用は

スペイン軍に忠実な原住民戦闘指揮者を拾い上げる範囲内に限定されなければならなかった。モロッコ・植民地総局軍事局長の陸軍大佐は31年4月の上級軍学校での講演で述べた——「少し教養を持った若い原住民が民族主義的思考を持つと、本国にとって危険なものとなります。彼らが司令官になろうと思って〔原住民〕部隊に入ってくるのを避けなければなりません」。⁴⁴

上掲の軍事局長の講演は平定完了期におけるスペイン軍自身による原住民兵力の評価も垣間見せるものである——「ある国〔植民地〕の平定の手段は〔軍事〕力と政治を組み合わせることであります」、「平定された国が平常となった」第2期では、メトロポリの軍が一部の役割を果たさなければならぬとしても、メトロポリにとってそれは「大変な負担」となるので、「〔平定された〕国の現地人を用いる」のがよい、植民地軍は、気候など現地の状況からしても、またメトロポリの人員や費用を節約することからも「メトロポリの軍の負担を軽くするのであります」。⁴⁵本項で見てきたこととこの講演からすると、スペイン軍は平定完了までにうまく原住民兵力を組織できたと見ていたようである。

本項の最後に原住民兵力の費用を見ておこう。リーフ戦争中には全原住民兵力の費用がスペイン国家によって賄われた。26年からFRIを除いた原住民兵力の費用はハリーファ政府の支出とされた。ハリーファが主権者との擬制に移行するためだった。しかし原住民兵力のための支出はハリーファ政府の歳出の75%（27年）～62%（30年）に達した。2.1.(2)の末尾でハリーファ政府の歳入におけるスペイン政府の借款の率が67%（27年）～64%（30年）だったことを見た。今や明らかなように、ハリーファ政府財政の大赤字とスペイン政府の借款の要因（秘密）は原住民兵力の維持にあった。以上からは、ハリーファ政府の統治の実態と、メトロポリの負担の軽減が依然としてスペイン国家の課題だったことがわかる。しかし逆から見れば、軍事費以外の原住民統治費用は原住民自身の負担でほぼ賄えるようになった。⁴⁶

III. モロッコ植民地からメトロポリへ

3.1. 軍事基地

26年11月、フランコはスペイン軍の「改革の必要性」を語りながら、注意を喚起した——「〔イベリア〕半島の軍を組織し進歩させる際に、その将校団の能力と実力を向上させる際に、それと並行して在アフリカ軍についても同様のことをしないなら、それは許されない怠慢と言ってよい」（*RTC*）。⁴⁷

27年に入ると、スペイン軍はメトロポリの徴募兵を次々と帰還させた。スペイン政府の公式の平定宣言が出された27年10月、在モロッコ兵力を削減し、アフリカ軍を再編する政令が出された——スペイン領の「全面的占領」と武装解除によって「国の収支の均衡化をずっと難しくしていた負担を国庫から除きたいという国の願望を十分に満たす」ことができるよ

うになった、かくして「既に始まっている兵力削減」に加えて、スペイン領とセウタ・メリーリャなどの北アフリカ地域のスペイン領土を「ただ一つの軍管区」に統合し、高等弁務官が在モロッコ軍最高司令官を兼ねるようにする。28年10月には、モロッコ駐屯部隊の一部がイベリア半島南東沿岸部6か所に移動して、「在アフリカ軍予備部隊」とされた。かくして、在モロッコ兵力の構成を大きく変えることがこころみられた。まず、その中核はFRIとアスカリの原住民兵、外人部隊、それにメトロポリの志願兵から成るようにされた。実際には志願兵で「ヨーロッパ兵」を満たすことができず、徴募兵のアフリカ派遣が続いた。次に、歩兵隊、騎兵隊の多くは原住民兵と外人部隊、砲兵隊・工兵隊・補給部隊はメトロポリ兵という明確な役割分担が導入されたようとした。容易に理解できるように、前者に前衛部隊の役割が与えられたのである。しかし、やはり実際にはとくに歩兵隊を原住民兵に任せるわけにはいかなかった。歩兵隊で原住民兵が多数となることは「アンワールの破局」の教訓からして危険なことだったからだ（フランコも、「部隊の削減に当たっては、しかしヨーロッパ人部隊と原住民兵部隊の適当な比率を変えることはない」と言った（*RTC*、28年2月））。平定期の在モロッコのメトロポリ兵の実数を示すのはなかなか難しい。それは29～30年に5～6万人くらい（外人部隊を含む）、また徴募兵が志願兵より多かったと推測される。それでも、原住民兵（約3万人）と合わせた総計8～9万の兵士は一大兵力だった。それは30年にフランスの軍事誌が指摘した通りだった——スペイン領では多数の部隊が帰還したが、それでもフランス領に比して非常に多くの「占領軍」がいる、「実際にはこの方策は立派なものだと言う他はない」。⁴⁸

スペイン領はたしかに「一大兵営」（ネリン）となった。この意味は以下の一連の言明と本稿の対象時期における（さらに将来における大規模な）その実行によって明らかとなる——原住民兵は植民地戦争においてだけでなく、将来的には「我が祖国の防衛」にも使える（ベレンゲル陸軍大尉（「アンワールの破局」時の高等弁務官の弟）、（既に!）22年）／モロッコに植民地軍とでも言うべき予備部隊を擁しておくべきである、この部隊は「正規または不正規の戦争」[前者は国家間の戦争、後者は植民地戦争さらに内戦]の際に使用できる（バレーラ陸軍中佐、*RTC*、29年2月）／モロッコに植民地軍を持っていると「状況が要求するときにどこでも使用できるので」都合が良い、第1次世界大戦でフランス軍が植民地部隊をヨーロッパで使用したように（ハリーファ軍司令官、同29年3月）／「国の戦争 *guerra nacional* の時には、メトロポリはこれらの植民地軍を動員することができるのであります」（2.2.で引用の31年の上級軍学校での陸軍大佐の講演）。メトロポリの政府がその費用をほとんど丸抱えして原住民兵力を維持せんとした理由の一端も以上から見えて来ると言ってよい。実際に、まず29年1月、サンチェス・ゲーラらが企図したプロメシミアメントを挫折させるために在モロッコ外人部隊が動員された。次に30年12月、ウエスカ県ハカでの共和政樹立を目指した蜂起などの際に、メリーリャとセウタのやはり外人部隊にメトロポリへの乗船命令が出された（少なくともメリーリャの部隊が実際に海峡を渡った）。これらの実際の動員の後に

上級軍学校で講演した上の陸軍大佐の名がアセンシオ・トラードだったことにも注目すべきである。後のメトロポリの内戦中にラルゴ・カバリェーロ政府国防次官となった軍人は（も）植民地兵力のメトロポリへの動員を当然のことと見ていたのである。さらにその講演日が31年4月18日だったこと（共和政成立の4日後）も付け加えておくべきである。⁴⁹

3.2. 軍アフリカ派

スペイン軍アフリカ派は、モロッコ戦争とくにリーフ戦争とその後の平定期に、さらにとくに原住民を統治した原住民兵をうまく使用することで自らを確立した。この間に植民地モロッコは事実上、軍アフリカ派が支配するところとなった。つまり、軍アフリカ派はスペイン国家の名で保有するモロッコ植民地を得たのである。⁵⁰

軍アフリカ派の主張や見解について、既に本稿ではその現地のマニフェスト誌*RTC*の多くの論説を紹介、引用してきた。⁵¹ここでは以下、軍アフリカ派の性格と存在意義についてあらためて総括的見通しを与えておく。

第1に、植民地とその権益が縮小した「[18] 98年の破局」以後のスペインでは植民地政治党派の形成が弱かったので、軍アフリカ派が一種の植民地党としての政治的役割をも担うことになった。*RTC*で1論者が「植民地政党的創設」を提案したことがあった（28年12月）。しかし、最有力のアフリカ植民地主義派組織だったスペイン・アフリカ連盟も、何名かの国会議員を擁していたとしても、その役割を果たす存在とはならなかった。⁵²

第2に、上の第1の故もあって、軍アフリカ派はメトロポリのモロッコ植民地への（無）関心に常に敏感かつ攻勢的に反応した。スペイン政府の公式の平定宣言の直後にガルシーア・フィゲラスは嘆いた——「最良の場合でもメトロポリでは全般的な世論は植民地のことに無関心である。この種の対外的なことで通常の生活をできるだけ乱されたくないと思っている」、「[植民地のことに] 好意的な世論の醸成」を図らなければならない（*RHA*、27年12月）。モロッコ植民地の確保・維持を推進し実行したプリモ政権が崩壊すると、軍アフリカ派の焦燥は募った——支出が多過ぎるとしてモロッコでのスペインの事業に反対する人がいる、スペインはモロッコで多くの事業をおこなって来た、「近いうちに[スペイン領の] 全支出はハリーファ政府自身の収入で賄えるようになるだろう」（同30年10月）／「スペイン人はモロッコのことをよく知らない」（*RTC*、30年12月）／徴募兵がモロッコに派遣されている時に「スペインがモロッコでおこなっている事業の重要性和その主要な様相をよく知って、後に各家庭に戻るように」しなければならない、彼らが「アフリカでのスペインの利益」をよく理解して、「モーロ人の地」と呼ばれている保護領の「恐怖と不快な印象」を消し去るようにしなければならない（同31年3月）／メトロポリがモロッコ政策で一致することが必要である、これは「国民的事業」なのだ／マドリードの新聞はモロッコでの支出は多過ぎるなどと言って「不当なキャンペーン」をおこなっている、モロッコについて「メトロポリの無関心」がある一方で、モロッコはまた「政治上の武器」となっているのだ／モロッコについてのメト

ロボリの新聞の今までの「無関心に満ちた沈黙」(以上いずれもTR、30年8月)。⁵³

第3に、軍アフリカ派は在モロッコの植民地軍の独自性を主張したのではなかった。モロッコはスペイン軍の最良の実践と経験の場であるとして、むしろメトロポリの軍と植民地軍の分離に反対だった。これまでしばしば引用してきたフランコのいくつかの直言はそれを代表するものである。⁵⁴

第4に、第3とも関連して、やはり本稿の随所で見て来たように、軍アフリカ派はメトロポリの徴募兵に依拠しようとせず、またこれらの徴募兵をあまり信頼していなかった。⁵⁵

以上から見ると、この時期のスペイン軍アフリカ派は同時期のヨーロッパの諸軍隊には見られない独得の、しかし後のスペインの政治・社会にとってときに決定的とも言える性格と存在意義を有したと言ってよい。⁵⁶その起源は何よりもやはり「98年の破局」以後の軍の存在意義、とくに20世紀のモロッコでの植民地戦争(と21年の「アンワールの破局」)がスペイン政治・社会に持った意義に求めなければならない。⁵⁷

軍アフリカ派が確保し支配したモロッコ植民地はメトロポリの国際政治上の位置を、それ故にその対外政策を左右するものとなった。それは、「98年の破局」で国際政治において後退したスペイン国家に、いくばくかの自主的な国際政治上の行動の可能性と余地を与えることになった。いくつかの論説が自負を込めてそれを表明した——アフリカの諸問題を検討すると、「モロッコを全く放棄してしまっていたら、国際的に見てスペインの利益がこうむったであろう損害」がわかるだろう(RTC、27年8月)／「少し前までの我が国の対外政策を特徴づけていたのは自主性の無さだった。・・・一方では古くからの海外の我が国の所有地を失ってしまい、他方ではヨーロッパに背を向けていたからである」、「今やスペインが自らの恒常的利益に見合う自主的な[対外]政策を展開するときだ」(同27年12月)／「モロッコは常に我が国の国際政策の中軸に位置するだろう。我が国の他の列強との関係には後にも先にもモロッコ問題があるだろう」(RHA、30年2月)。⁵⁸

このことを如実に表したのは「タンヘル[タンジャ]はスペインのものだ」¡Tánger para España!の外交キャンペーンの復活である。これは26年5～6月つまり平定の見通しが開けた直後に始まった。今回はプリモ自身も強気だった。もちろんRTC、アフリカ連盟つまりRHA、TR、さらにAAもこれを全面的に支持した。とくにTRは、タンジャが「まだ陰謀の拠点で、反乱者の隠れ家」になっている、スペイン領への武器と食糧の密輸の場所になっていると批難した。アフリカ連盟は27年2月に、英・仏両政府に対して断固としてタンジャのスペイン領編入を要求するようプリモ政府に要望書を提出した。26年8月にプリモ政府はムッソリーニのイタリア政府と友好協定を結んだ。その主要な意図は、タンジャのスペイン領編入へのイタリアの支持を取りつけることと、それと引きかえにタンジャでのイタリアの權益を承認することだった。さらに、国際連盟非常任理事国だったスペインの政府は常任理事国のポストを要求(これは既に26年2月に表明されていた)、この要求あるいはタンジャのスペイン領編入のどちらかが実現しなければ国際連盟を脱退するとの強硬姿勢を示した(実際

に、プリモ政府は26年9月に国際連盟脱退を宣言した。連盟に復帰したのは、すぐ後述の28年7月の英・仏・西・伊協定後の同年9月だった。しかしスペインは依然として非常任理事国のままだった。27年2月から断続的に持たれたタンジャをめぐる英・仏両政府との交渉は28年7月まで続いた。この月に英・仏・西・伊間のパリ協定が成った。タンジャのスペイン領編入は成らなかったが、この協定でスペイン側のいくつかの要求（とくにタンジャ警察隊の指揮権をスペイン軍人が握ること）が承認された（イタリアも管理委員会に参加することになった）。英・仏に対抗してタンジャで優位に立つためにイタリアを巻き込んだことも、リーフ戦争後のスペインの外交攻勢を示している（「国際的場面でのスペインの最も重要な意義はその地中海政策の大きな可能性に存している」（*RTC*、30年8月）。もちろん、プリモ政府の外交上の攻勢は、スペイン国家の威信を強調してスペイン国内でも体制への支持を得ようとの意図を持っていた。⁵⁹

とはいえ、以上のことはスペイン領の平定でスペイン国家が英・仏とくにフランスと対抗できるようになったことを意味しない。むしろ、スペインがモロッコ植民地のフランスとの共同統治をより対等な形で求め始めたと見るのがよい。平定期に*RTC*も*RHA*も*TR*も西仏協力延長の論調で満ちているのは対等な西仏協力が可能となったことの喜びの表現とみなされうる。スペイン領高等弁務官とフランス領統監の相互訪問もおこなわれた（29年5月と11月）。スペインがヨーロッパ列強に「背を向け」ずにより「自主的な政策」を展開しようとしたことに対して一抹の困惑を示したのはフランス側だった——「このような状況では〔スペインとの〕あらゆる協力を断念したい気もしてくる」（*AF*、27年7月）。⁶⁰

27年9月に1陸軍中佐の手になるジブラルタル海峡海底トンネル計画案が勸業相に提出された。この計画案は、タリーファ西方のパローマ岬とタンジャ近くのスペイン領の沿岸間の30～32kmの長さのトンネルに鉄道を敷設するというものだった。28年4月に政府は建設検討委員会を設立、同年6月にはスペイン・アフリカ連盟も海底トンネル建設推進の要望書を政府に提出した。29年5月に閣議で試掘開始が決定され、翌6月にスペイン政府が委託した業者によって試掘が開始された。以上の経過が示すように、この海底トンネル計画は軍、アフリカ植民地主義派組織それにプリモ政府が一丸となって推進した。しかも短期間に進展した。この計画もスペイン領確保があらたに可能とさせたものである。海底トンネルを走る鉄道はスペインとその保護領を結ぶだけでなく、ダカル-アフリカ大陸南端にまで、また北アフリカを通してスエズにまで至ることが展望されていた。⁶¹

モロッコでの植民地戦争と原住民統治は、自らに対抗・敵対した（する）人々に対する強度の「敵」意識を軍アフリカ派に認識・自覚させた。この敵は「共産主義者」と結びつけられ、さらに敵は植民地からメトロポリにやって来るとされた——「国際共産主義は、その戦術に忠実に従って植民地からメトロポリに革命を持ち込もうとしている」（ロペーラ、*RTC*、27年2月）／「共産主義者は植民地で騒動を起こして、メトロポリを弱体化しようとしている。・・・彼らはモロッコ放棄を要求し、あらゆる手段で原住民を扇動し、またメトロポリ

では植民地でのどのような災厄も最大限に利用しようとしている」(ガルシア・フィゲラス、同28年11月。ここで念頭に置かれているのは主にフランス領でのこと)／第3インターナショナルの活動が北アフリカで広まっている、彼らは「植民地からメトロポリに革命をもたらすのだ」と言っている(RHA、30年3-4-5月)。かくして、スペイン国家=スペイン軍とくに軍アフリカ派に抵抗した(する)人々を「共産主義者」として敵視することが軍アフリカ派を通して植民地モロッコからメトロポリにもたらされることになった。また2.1.(3)で見たように、このような「赤の危険」から、植民地ではむしろイスラームを取り込む戦略がとられたのである(上の最後の論説は2.1.(3)でも既に引用)。⁶²

18年間の戦争とくにリーフ戦争によってモロッコ植民地を得たことで、アフリカ派軍人は軍の中で優位に立っていった。相互に深く関連した次の2つのことがそれをよく示す。

26年6月、プリモ政府はアフリカ派軍人が要求していた戦功による昇進制度を導入した。以前からこの制度に最も反対していたのは砲兵隊だった。同年9月、イベリア半島の全砲兵隊が兵営に立て籠って抗議の意思を示すと、プリモ政府は戒厳令を布き、また在モロッコ軍を除いた砲兵隊の全将校を解任し現役から外した。数十名の砲兵隊将校が収監・監禁された(同年末に無罪放免)。他の将校は現役復帰のために政府支持の誓約書を提出しなければならなかった。29年1月のプロヌンシアメントの計画と若干の行動にはやはり多くの砲兵隊が関わった。プリモ政府は今回はイベリア半島勤務の砲兵隊の全将校の軍籍を一時的に剥奪した。軍法会議で9名の砲兵隊将校に死刑が宣告された(後に減刑)。これによって砲兵隊は事実上、解散となった。現役復帰を希望する元の砲兵隊将校は、26年の時のように政府支持の誓約書を提出しなければならなかった。末期のプリモ政府は、非アフリカ派軍人の抵抗を削ぐ中で、結果的にアフリカ派軍人にさらに頼るようになったのである。⁶³

28年10月、サラゴサに陸軍士官学校Academia General Militarが開校した。以前のトレードの陸軍士官学校の卒業生だったプリモは権力掌握直後から陸軍士官学校の再建を図ろうとした。24年9月に設立準備委員会が設置された。この委員会の委員や教育方針は軍アフリカ派のみを代表するものではなかった。モロッコ平定が進んだ27年3月に正式の設立委員会が任命されたときには、それはフランコからアフリカ派でほぼ占められた。28年1月にフランコが校長に任命されたが、当初はプリモもまたフランコ自身も外人部隊の創立者のかのミリヤン・アストゥライを校長に推していたこともアフリカ派主導の運営方針を示して余りある。果たして、教官(123名の教官リストがあるが、実際には90人くらいだったようだ)にはモロッコでの戦闘を経験した士官・下士官が採用された。モロッコでの植民地戦争の経験が同校の教育方針の基礎となったのである。校長フランコは自らのモロッコでの戦闘経験と外人部隊の「信条」を基にして作成した「十戒」Decálogoで士官候補生の範を示した——「祖国への大いなる愛と国王への忠誠」、「不満をけっして言わず、それを言うのを許さない」、「部下に慕われ、上官に望まれるようになる」、「犠牲的精神・・・最も危険で辛い任務」、「高貴な同志愛」、「勇敢で献身的」など。フランコは開校式での講話でスペイン軍の伝統も強調し

た——「カルロス3世の賢明な軍規はけっしてすたれてはいないのであります」。半ば閉鎖的な軍人社会を維持・再生産して来たスペイン軍の「伝統的精神」はアフリカ派軍人の目指すものと結合しえた。これらの範をたたき込むためと一般社会との隔離を図るため、さらには特権意識の醸成のため、同校は全寮制とされた。同校の開校に伴って、歩兵隊・砲兵隊・騎兵隊・工兵隊・補給部隊の各士官学校も再編されることになっていた。30年12月のハカ蜂起の際に、反乱者のサラゴースへの前進を阻止するために、陸軍士官学校の士官候補生の大隊がウエスカ街道に展開した。これは校長命令によるものだった。後の共和政の軍改革で31年7月に廃校となるまで、716人の士官候補生が同校を卒業した（後のメトロポリの内戦では、その94%が反乱側についた）。⁶⁴

プリモ体制理解との関連で述べれば、次のことが言える。今までも指摘されて来たように、プリモの体制は頼みとする軍の支持を確実に取り付けていたのではなかった。リーフ戦争の後半とくにフランス軍との協力で勝利を目指して以降、プリモは自らの権力維持のためにも、ますますアフリカ派軍人の支持に傾斜していった。しかし独裁体制批判が強まってくると、軍アフリカ派はプリモ体制に頼ろうとはしなくなった。⁶⁵

プリモ政府が崩壊しメトロポリで王政反対派や共和派の活動が広まると、アフリカ植民地主義派は共和政樹立の動きを警戒した。新政体が樹立された場合の発禁を恐れたのだろうか、*RTC*と*RHA*には表立った共和派批判は現れなかった。アフリカ現地でこの役を買って出たのは*TR*だった。初めのうちは、南アメリカの多くの人々は「自分がヨーロッパ人なら、王政の支持者だと言うだろう」というような間接的な言い方だった（30年10月）。31年になると、大衆は共和政支持に向かっているが、共和派が「治安の保障や法的手段」を持ち合わせているか疑問だ（1月）、「スペインは革命を恐れる、スペインは社会平和と秩序の断固とした味方である」／共和政に対する疑問をよく理解してから「王政がよいか共和政がよいか」議論すべきだ（2月）と、共和政支持を思い止まらせる論調となった。議会選挙実施が確実になると、「共和政には反対」と明確な主張が現れ（3月）、市町村議会選挙投票日直前には、「ジャコバン派が統治し始めたら正義も個々人の権利も失われるのだ」と、共和政への恐怖を煽る論法がとられた（4月）。他方メトロポリでは、軍内3紙の中では王政支持と伝統主義で最も目立ち、アフリカ派を擁護するようになった『陸海軍』*Ejército y Armada*が同様の役割を果たした。同紙は、国王に「独裁」の責任はない、独裁中の政府に責任があるのだとの意見に賛意を表した（30年3月）。議会選挙が日程に上ると、まずは、「スペイン人の多数は現憲法に満足しており、他の憲法は必要ないと言っている」として1876年憲法体制の存続を求め（同年5月）、後には、「スペイン人が共和派のおとりに幻惑されずに、有能の人たちで大多数の人々がなじんでおりまた望んでもいる政体の支持者つまり王政派をコルテス [国会] に送るのがよい」との明確な主張をした（同年12月）。もちろん、ハカ蜂起など30年12月の諸事件に対しては、「祖国に敵対する運動」、「狂気の沙汰」との強烈な反発を示した。市町村議会選挙8日前には、これは「王政派と反王政派」つまり「秩序の擁護者と革命派」の2大陣

営の争いだ、「政治には関わらないと言っているような人々は皆、秩序を主張する側に加わるときだ」と論すように言って、中間派を誘い込もうとした。投票日当日には、「共和派の候補者に投票した全ての人々が共和派がして来たことをよく知っていたとは思えない」との論評が載った。⁶⁶

おわりに

「はじめに」で設定した3課題は本文でほぼ果たされている。ここでは、本文で指摘したこともあらためて確認しながら、本稿の総括をこころみ、若干の展望も示しておきたい。

第1に、戦争と平定によってモロッコに植民地が創出され、その過程で原住民がつくり出された。「モーロ人」は「原住民」となったと言ってもよい。⁶⁷

第2に、軍アフリカ派はモロッコ植民地を自らの領域のようにみなすようになった。

第3に、軍アフリカ派によって維持されるモロッコ植民地はスペイン国家の国際政治上の位置をも左右するものとなった。別の言い方をすると、スペイン国家はモロッコ植民地に呪縛されることにもなった。

第4に、軍アフリカ派は軍内で優位に立っただけでなく、メトロポリの政治・社会にも作用や影響力を及ぼす存在となった。アフリカ派が有力となった軍がその政治的機能を維持し、ときにそれを増大させることになったと言ってもよい。

第5に、30～31年頃に本格的な原住民統治が始まったとみなされうる。しかし、それとほぼ同時にあるいはその直後に、メトロポリでの共和政による軍改革とモロッコ民族運動の展開が軍アフリカ派を挟撃することになる。⁶⁸

最後に、メトロポリでの共和政期と内戦を展望すると、モロッコでの植民地支配の暴力と暴力性（「敵」意識と極度の行動主義の正当化）がメトロポリの政治・社会にも意味を持ち始めることを指摘しておかねばならないだろう。⁶⁹

注

- 1 リーフ戦争の諸様相とくにメトロポリ（植民地本国）の「動揺」、またリーフ側（本稿ではリーフ勢力と呼ぶ）の抵抗とその政治体については、深澤「アブド・アルカリームの恐怖——リーフ戦争とスペイン政治・社会の動揺（1921-1926年）——」上、中、下、『人文科学論集』（茨城大学）41, 43, 44（2004-2005）；深澤「「リーフ共和国」——抵抗と新政治・社会への挑戦——」上、下、『人文コミュニケーション学科論集』（茨城大学）3, 4（2007-2008）参照。
- 2 「平定」、「原住民」、また後出の「モーロ人」の語がメトロポリ側からの一方的な認識枠組みを表していることは論を待たない。しかし以下の本稿では、煩雑の理由のみによって、これらの語への括弧を外すことにする。
- 3 Josep Lluís MATEO DIESTE, *El "Moro" entre los primitivos. El caso del Protectorado Español en*

- Marruecos (Barcelona, 1997); Sebastian BALFOUR, *Deadly Embrace. Morocco and the Road to the Spanish Civil War* (Oxford, 2002)/ *Abrazo mortal. De la guerra colonial a la Guerra Civil en España y Marruecos (1909-1939)* (Barcelona, 2002); María Rosa de MADARIAGA, *Los moros que trajo Franco...La intervención de tropas coloniales en la Guerra Civil Española* (Barcelona, 2002); MATEO DIESTE, *La «hermandad» hispano-marroquí. Política y religión bajo el Protectorado español en Marruecos (1912-1956)* (Barcelona, 2003); José Luis VILLANOVA, *El Protectorado de España en Marruecos. Organización política y territorial* (Barcelona, 2004); Gustau NERÍN, *La guerra que vino de África* (Barcelona, 2005); Villanova, *Los interventores. La piedra angular del Protectorado Español en Marruecos* (Barcelona, 2006).
- 4 MATEO DIESTE (2003); VILLANOVA (2004); VILLANOVA (2006). 以下、とくに注記しないが、*Historia de España* (fundada por Ramón MENÉNDEZ PIDAL), Tomo XXXVIII, *La España de Alfonso XIII. El estado y la política (1902-1931)*, Vol.II (Madrid, 1997), Parte II, Caps. IV-VI, Parte III (すべて Javier TUSELL) も本稿の前提となる。
 - 5 6月中旬のサンフルホの総理府モロッコ・植民地総局（スペイン政府のスペイン領担当部局）暫定局長への報告でも、西部地域で（も）「敵は完全に守勢に回っている」とされた。以上、Archivo General Militar de Madrid (AGMM), Sección de África[本稿で用いるのは全て、このセクションのもの], R682 [マイクロフィルム番号], 500-2 [文書綴り番号下2項], 24-VI-[19]26 [文書の日付], 500-3, 2-VI-26, 17-VI-26 (Servicio Histórico Militar, *Historia de las campañas de Marruecos*, IV (Madrid, 1981), 137-139にも引用されている)。
 - 6 AGMM, R682, 500-3, 2-VI-26, 17-VI-26. スペイン軍による部族・有力者・住民間の対立と分断の意図的醸成工作とその効果については、深澤（2004-2005）；深澤（2007-2008）参照。後の32年の[植民地]行政監察官（本文で後出）向けの講義でも、部族が分裂していたらそれを利用すること、「分裂していなかったら分裂させるのがよい」との明言がなされた（Coronel CAPAZ/Comandante GALERA/Capitán OCHOA IGLESIAS, *Asuntos Indígenas. Orientaciones a los Interventores en la labor de Protectorado en Marruecos* (Las Palmas de Gran Canaria, 1932), 70)。
 - 7 26年6月以降のスペイン軍の軍事行動については以下を参照。General GODED, *Marruecos. Las etapas de la pacificación* (Madrid, 1932), 330-435; *Historia de las campañas de Marruecos*, IV, 140-172; Carlos HERNÁNDEZ DE HERRERA/Tomás GARCÍA FIGUERAS, *Acción de España en Marruecos* (Madrid, 1929), 622-641; Francisco GÓMEZ- JORDANA SOUZA, *La tramoya de nuestra actuación en Marruecos* (Madrid, 1976), 186- 210; Carlos MARTÍNEZ CAMPOS, *España bélica. El siglo XX. Marruecos* (Madrid, 1972), 334-357; AGMM, R682, 500-1, 500-2, 500-3/R82, 8-3, 82-2, 82-4, 82-6の諸文書など。平定の進行を示す簡明な地図が、*Bulletin du Comité de l'Afrique Française (AF)*, IX-[19]26, 471, III-27, 117, VII-27, 285にある。
 - 8 GODED, 330-435（引用部分は354）；AGMM, R682, 500-1, 500-2の諸文書；RTC, VIII-[19]26, 190。
 - 9 AGMM, R682, 500-1, □-XII-26, 31-XII-26/R82, 8-3, □-□-27; *Boletín Oficial de la Zona de Protectorado Español en Marruecos (BOZPEM)*, 1926, n.16 (25-VIII), 18 (25-IX), 20 (25-X), 1927, n.14 (25-VII); BALFOUR, 118-119。
 - 10 Inspección General de Intervención y Fuerzas Jafifianas, *Manual para el servicio del oficial de Intervención en Marruecos* (Madrid, 1928), 13; GODED, 439-447; *El Telegrama del Rif (TR)*, 29-VI, 27-VII, 29-X-[19]26, 22-XII-27; VILLANOVA (2006), 96-97; BALFOUR, 118- 119; AF, VI-28, 225; Intervenciones Militares de Melilla, *Vademécum* (Melilla, 1929), 12; Intervenciones Militares de Tetuán, *Vademécum*(Tetuán, 1929), 24-26; Intervenciones Militares de Larache, *Vademécum* (Larache, 1929), 23-25; Intervenciones Militares de Larache, *Vademécum* (Larache, 1930), 53-54; Alta Comisaría de la República Española en Marruecos, Intervención y Fuerzas Jafifianas, Inspección, *Vademécum*, Año 1930 (Ceuta, 1931), 99-100; GÓMEZ-JORDANA, 217-222。
 - 11 さらに付加すると、平定勲章授与勅令の前文にも「18年間の凄惨極まる絶え間ない戦闘」との文

- 言があった。*RTC*, XI-26, 241 (Francisco FRANCO BAHMONDE, *Papeles de la Guerra de Marruecos* (Madrid, 1986), 242に所収), VII-27, 149; *TR*, 13-VII-27; GODED, 432; *BOZPEM*, 1927, n.22 (25-XI); HERNÁNDEZ DE HERRERA/GARCÍA FIGUERAS, *Acción de España en Marruecos. Documentos* (Madrid, 1930), doc.57; GÓMEZ-JORDANA, 214.
- 12 26年6～7月の西仏会談については、深澤 (2004-2005), 3.1.2.参照。AGMM, R682, 500-2, 15-VII-26, 500-3, 2-VI-26, 17-VI-26; *Revista Hispano-Africana (RHA)*, V-[19]27, 10; *TR*, 16-VI-27; Susana SUEIRO SEOANE, *España en el Mediterráneo. Primo de Rivera y la “cuestión marroquí”, 1923-1930* (Madrid, 1993), 365-368.プリモ自身は、タンジャをめぐり交渉 (3.2.で後述) でスペインが優位に立てるなら、それと引きかえにバヌゼルワルやその他の地をフランス領に入れてもよいと考えていた (TUSELL/Genoveva García QUEIPO DE LLANO, *El dictador y el mediador. Las relaciones hispanoinglesas durante la dictadura de Primo de Rivera* (Madrid, 1986), 109)。
 - 13 GODED, 449; *RTC*, I-24, 5, VIII-27, 180; *RHA*, XII-27, 6; CAPAZ, *Modalidades de la guerra de montañas en Marruecos. Asuntos Indígenas* (Tetuán, 1931), 15.
 - 14 AGMM, R682, 500-2, 22-VI-26/R141, 82-6, □-V-27; *TR*, 19-IV-27; *RTC*, IX-27, 210; *Manual...*, 7; *Acción... Documentos*, doc.57.
 - 15 以上の「寝返り」は以下に拠る。CAPAZ, *Cabecillas rebeldes en Gomara desde 1,913 a 1,927* (1928), 35; Juan VILLALÓN DOMBRIZ, *Cabecillas rebeldes en el Rif desde 1,913 a 1,927* (1930), 20, 33-34; José FONT Y JOFRE DE VILLEGAS, *Estudio sobre los principales cabecillas rebeldes de Yebala, de 1,913 a 1,927* (1930), 14-16, 19-21; *Cabecillas rebeldes de 1,913 a 1,927* (s.f.), 50-51 (以上、Biblioteca Nacional de España, 旧Sección de África 所蔵); *RTC*, VIII-26, 174; *TR*, 1-VIII-26; GODED, 86-87, 355-356; *Historia de las campañas de Marruecos*, IV, 146-147; VILLANOVA (2006), 152; MADARIAGA, *Abd-el-Krim el Jatabi. La lucha por la independencia* (Madrid, 2009), 423; MATEO DIESTE (2003), 194, 206. また、GARCÍA FIGUERAS, *Temas de Protectorado* (Ceuta, 1926), 38; Emilio Blanco Izaga: *Coronel en el Rif. Una selección de su obra, publicada e inédita, sobre la estructura sociopolítica de los rifeños del norte de Marruecos* (Melilla, 1995), 451, 461.
 - 16 MATEO DIESTE (2003), 189-206.
 - 17 *BOZPEM*, 1931, n.7 (10-IV).
 - 18 *RTC*, XII-26, 265 (FRANCO, 234-235に所収), IV-27, 73.ホルダーナ発言はラジオで放送されたもの。*RTC*には既に26年9月に、「スペインは原住民政策の確かな方針を示すことを考え始めなければならない」との論説が現れていた (IX-26, 211)。
 - 19 「礎石」はピリヤノバの用語 (VILLANOVA (2006))。 *RTC*, XII-26, 265, 272, I-27, 1; *Manual...*, 83, 90; 各 *Vademécum*; VILLANOVA (2006), 178-189; MATEO DIESTE (2003), 79-90; Mimoun AZIZA, *La sociedad rifeña frente al Protectorado español de Marruecos (1912-1956)* (Barcelona, 2003), 118-121; MATEO DIESTE, ‘La oficina de intervención como espacio de interacción socio-política entre el *murāqib* y la *cabila*: de la ideología colonial a las prácticas cotidianas’, Fernando RODRÍGUEZ MEDIANO/Helena de FELIPE (eds.), *El Protectorado Español en Marruecos. Gestión colonial e identidades* (Madrid, 2002).
 - 20 CAPAZ/GALERA/OCHOA IGLESIAS, 18, 69-70; AGMM, R682, 500-2, 15-VII-26/R141, 82-6, 11-VIII-27 (両文書ともバヌワリヤガールのカーイドの任命と更迭について); *Manual...*, 9-11, 155-161, 210-211; GARCÍA FIGUERAS (1926), 30-31; VILLANOVA (2006), 110-122; CAPAZ (1931), 16-17; BALFOUR, 120; MATEO DIESTE (2002), 152, 166-168. 情報操作ももちろん厳格におこなわれた。定期刊行物は事前検閲された (*BOZPEM*, 1927, n.17(10-IX))。「良い新聞」は普及するが、「危険な」新聞は発禁・流入禁止とされた (*Manual...*, 169)。都市部では住民代表機関がつくられ、スペイン人、ムスリム、「イスラエル人」の範疇毎に住民代表が選ばれた。これらの機関では、人口比で少数だったにもかかわらずスペイン人の代表が多数を占めた (VILLANOVA (2004), 297)。
 - 21 Inspección General de Intervención y Tropas Jalfianas, *Cuestionario sobre Kabilas* (Tetuán, 1926);

- Protectorado de España en Marruecos, Cuestionario sobre las Kabilas* (Melilla, 1926); VILLANOVA (2006), 249-250.
- 22 *Manual...*, 127; *TR*, 22-XII-26, 11-XII-27, 1-I-28; AGMM, R140, 82-4, □-III-27; 各*Vademécum* (本文で示した人口統計については、Alta Comisaría de la República Española en Marruecos, Intervención y Fuerzas Jalifianas, Inspección, *Vademécum, Año 1931* (Ceuta, 1932), 69-70); VÍCTOR RUIZ ALBÉNIZ, *Colonización española en Marruecos* (Madrid, 1930), 49-54; VILLANOVA (2004), 252-253; VILLANOVA (2006), 21.人口調査の一環としておこなわれた不在者調査について、東イバーラの報告を見ることができた (27年5月。AGMM, R141, 82-6, □-V-27)。それによると、不在者総数は1,961 (うち10人が出頭)、そのうち「逃亡者」は738である。これらの数字と本文にある31年＝「平定完了期」の東イバーラの (f)-(e)=558との関連付けは難しい。
- 23 *BOZPEM*, 1927, n.17(10-IX), 1929, n.27(31-XII); *Manual...*, 'Formularios'; 各*Vademécum*; *Vademécum, Año 1930*, 110; *TR*, 1-I-28, 3-I-29; *RTC*, VI-28, 149-150; *RHA*, X-30, 110; CAPAZ (1931), 38; VILLANOVA (2006), 145; MATEO DIESTE (2003), 104-106.
- 24 *RTC*, II-28, 25 (FRANCO, 250に所収); *BOZPEM*, 1927, n.2(25-I); 各*Vademécum*; AGMM, R141, 82-6, □-V-27/R682, 500-1, □-XII-26; RUIZ ALBÉNIZ (1930), 118-123; VILLANOVA (2004), 203; MATEO DIESTE (2003), 116-123; MATEO DIESTE (2002), 155-158; AZIZA, 136-139.
- 25 Manuel del NIDO Y TORRES, *Marruecos. Apuntes para el oficial de Intervención y Tropas Coloniales* (Tetuán, 1925), 189; *Manual...*, 123-124, 166; RUIZ ALBÉNIZ (1930), 65-78; *RHA*, XII-27, 1-3; *BOZPEM*, 1930, n.19 (10-X). ハブーについてのやや詳しい検討が GARCÍA FIGUERAS (1926), 131-160にある。
- 26 CAPAZ/GALERA/OCHOA IGLESIAS, 59-60; *Manual...*, 164; 深澤「20世紀初頭のスペインのアフリカニズム——1898年の「破局」から帝国の復活へ——」上、下、『人文学科論集』37,38 (2002), 2.3.(4); MADARIAGA, *España y el Rif. Crónica de una historia casi olvidada* (Melilla, 1999/2ed., 2000), 242-267; *BOZPEM*, 1927, n.1 (10-I), n.17 (10-IX); MATEO DIESTE (2003), 234; VILLANOVA (2004), 88; GÓMEZ-JORDANA, 238-246; *Vademécum, Año 1931*, 91-98; *RTC*, IX-27, 218, XI-27, 269-270, XII-27, 287-288, I-28, 19, VI-30 (入植特集号); *RHA*, V-27, 5-6, XI-27, 17, V-28, 7, III-29, 4; José Fermín BONMATÍ, *Los españoles en el Magreb (siglos XIX y XX)* (Madrid, 1992), 69, 220-226, 240-243; Juan B. VILAR/María José VILAR, *La emigración española al Norte de África (1830-1999)* (Madrid, 1999), 34-35; AZIZA, 78-86. この時期の入植の実際については、RUIZ ALBÉNIZ (1930), 137-179も詳しい。カパスらは、ヨーロッパ人の入植に良いのはハーリーファ政府の土地と同族集団の土地であるとした (CAPAZ/GALERA/OCHOA IGLESIAS, 60-61)。ガルシーア・フィゲラスも「入植は保護領の中核を成す」として、スペイン人の入植強化を呼びかけた (GARCÍA FIGUERAS (1926), 181-197)。マダリアーガによると、プリモ政府は「人民の入植」*'colonización popular'*を喧伝したが、実際には貧農の入植は多くなかった (MADARIAGA (1999), 265)。
- 27 マテオ・ディエステもビリャノバも医師の役割を重視する (MATEO DIESTE (1997), 126; MATEO DIESTE (2003), 110-113; VILLANOVA (2004), 85, 148, 346; VILLANOVA (2006), 97-98, 124, 148, 184-186, 275)。深澤 (2002), 2.3.(2); CAPAZ/GALERA/OCHOA IGLESIAS, 70; *TR*, 12-XII-26; GARCÍA FIGUERAS (1926), 32; 各*Vademécum*; AGMM, R82, 8-3, □-□-27/R140, 82-4, □-III-27/R141, 82-6, □-V-27, 11-VIII-27; *RTC*, IX-26, 209-210, XII-26, 274-275, II-27, 41-43, III-27, 51-52, IV-27, 80-87, V-27, 122, VI-27, 138-140, XI-27, 264, VII-28, 185, VIII-28, 199-200, XI-28, 286, IV-29, 98, IX-29, 222-223, IX-30, 218; *RHA*, X-XI-XII-28, 23; RUIZ ALBÉNIZ (1930), 229-235; Jorge MOLERO MESA/Isabel JIMÉNEZ LUCENA/F. Javier MARTÍNEZ ANTONIO, 'Salud, enfermedad y colonización en el Protectorado español en Marruecos', MEDIANO/FELIPE(eds.).モロッコ植民地における医師の役割についてのやや詳しい検討がGARCÍA FIGUERAS (1926), 161-179に見られる。ここで著者は、医師の活動は原住民のスペイン統治への支持を獲得できるので、「保護領における活動の第1級の要素」となりうると述べている。28年7月のバルセローナの植民地協会の開所式での1講演でも、「健康という問題は植民地化のあらゆる問題の中で最も重要なことであります」と

- された (*Africa y América* (AA), XI-[19]28, 2733-2734.この場合の事例は赤道ギニア植民地である。植民地協会については本項で後述)。29年にはセビーリャ大学医学部に熱帯病講座が開設された。この場合にもモロッコよりも赤道ギニアが念頭に置かれていた (*RHA*, III-29, 7-8)。
- 28 各 *Vademécum*; *BOZPEM*, 1930, n.22 (25-XI); RUIZ ALBÉNIZ (1930), 204-213. ロベールは、アラブ化した都市部、イスラーム化した部族、ベルベルの伝統を保持している部族の各の状況に合わせて原住民教育がなされなければならないと言っていた (*RTC*, X-26, 217)。これは後出の「旧慣温存政策」の一部だった。
- 29 *Vademécum*, Año 1930, 113-129; *Vademécum*, Año 1931, 203-211; AGMM, R682, 500-2, 28-VI-26/R141, 82-6, 11-VIII- 27; *RTC*, IV-27, 88, X-27, 235-236, XI-27, 256-259, V-28, 144, XI-28, 269-271, X-29, 240-243, III-30, 69, XII-30, 303-306; RUIZ ALBÉNIZ (1930), 81-87, 105-111, 179-204 (引用部分は195); *RHA*, VI-28, 9-10, VI-VII-29, 14, XII-29, 17; *Acción.... Documentos*, doc.62; GÓMEZ-JORDANA, 227-238; AZIZA, 87-97; VILLANOVA (2004), 86- 87, 89-90; *TR*, 29-III, 27-IV-27.これらの公共事業(さらに2.2.で後述の原住民兵部隊の徴募)はまた、以前のリーフ地域からアルジェリアへの出稼ぎ(毎年2万～2万5千人)を一時的に減少させることになった (*RHA*, VIII-IX-29, 5; AZIZA, 148-149)。
- 30 *Vademécum*, Año 1930, 87; *Vademécum*, Año 1931, 213-216; *RTC*, IX-28, 219-220; Víctor MORALES LEZCANO, *El colonialismo hispano-francés en Marruecos(1898-1927)* (Granada, 2002/1ed., 1976), 107; AZIZA, 98-107.
- 31 *Vademécum*, Año 1930, 129; *RHA*, V-28, 2-4; RUIZ ALBÉNIZ (1930), 213-227; *Acción.... Documentos*, docs.56, 60, 61.*RTC*は、「モロコ人の土地とその耕作手段の改良、それらの成功と進歩に我々の平和の安定がかかっていることをモロコ人にわからせよう」との論評を載せた(26年7月)。しかし、スペイン人の入植キャンペーンを強力に展開した割には同誌での原住民による農業への言及は多くない (*RTC*, VII-26, 167, IV-27, 88)。
- 32 *RHA*, I-II-28, 4, II-29, 8, I-30, 11; *RTC*, II-28, 43; MORALES LEZCANO, *España y el Norte de Africa. El protectorado en Marruecos (1912-56)* (Madrid, 1986), 192; AZIZA, 88-90.
- 33 本文にある頻出する言葉づかいの注記はしない。*RTC*, X-28, 256, VIII-29, 204; RUIZ ALBÉNIZ (1930), 238.*RTC*や*RHA*におけるよりも同種の言葉づかいの頻度は低いが、*TR*の立場ももちろん同様である。たとえば、「モロッコでの文明化のための我々の行動」(7-X-30)。さらにAAも同様である。たとえば、「各メトロポリの文明化の使命に応える植民地化」(I- 31, 3061)。「使命」論批判については、深澤(2002), 3.2.; 深澤(2004-2005), 1.1.2, 2.4.1 参照。
- 34 ロベールは、「力を使わなくてもよいように[原住民に] 力を見せつけること」とも言った。ニードも、原住民に対してはあるときは「軍事力」を使用し、あるときは「精神力」を使用すると言っていた。*RHA*にも「モロッコ人の心の征服」をとの主張が現れた。*RTC*, VIII-26, 170, IX-26, 193, IV-27, 88; *RHA*, IV-29, 1-3; CAPAZ/GALERA/OCHOA IGLESIAS, 12-15; NIDO, 291.
- 35 *RTC*, II-27, 27-28; CAPAZ/GALERA/OCHOA IGLESIAS, 13, 45; CAPAZ (1931), 38, 46; MATEO DIESTE (1997), 102-104.軍アフリカ派がビュジョー、リヨテ、ガリエニなどフランス植民地統治者から学んだことは*RTC*自らがしばしば明らかにしている(代表例は、*RTC*, IX-27, 223)。
- 36 *RTC*, VII-26, 160, IX-26, 211; *RHA*, III-IV-V-30, 5-6; MATEO DIESTE (1997), 139-140; MATEO DIESTE (2003), 231, 235-240.
- 37 *Manual...*, 119-120, 123, 126, 134, 148-149; CAPAZ/GALERA/OCHOA IGLESIAS, 12; CAPAZ (1931), 47.
- 38 *RTC*, IX-26, 211, III-31, 68; CAPAZ (1931), 41; GARCÍA FIGUERAS(1926), 19-20, 121, 122, 130; CAPAZ/ GALERA/OCHOA IGLESIAS, 12; *RHA*, III-IV-28, 10, IV-29, 1, III-IV-31, 5; MATEO DIESTE (1997), 83-84, 91, 109-110, 113-114; MATEO DIESTE (2002), 144, 146. 同祖論は1880年代の「19世紀のアフリカニズム」の時には既に現れていた。20世紀初頭のアフリカニズムの時には唱えられた (Susan MARTIN- MÁRQUEZ, *Disorientations.Spanish Colonialism in Africa and the Performance of*

- Identity* (New Haven/London, 2008), 57-59; 深澤 (2002), 2.3.(4))。かくして、RTCやRHAにはアンダルース時代を偲ばせる多くの写真や絵が載せられた。
- 39 RTC, XI-27, 262-263; AA, IV-28, 2662, VII-VIII-28, 2695-2698, I-29, 2763-2764, II-III-29, 2787, IV-V-29, 2791-2793, II-30, 2904-2905, VIII-IX-30, 2998-2999, IV-V-31, 3103-3104; BOZPEM, 1930, n.4(25-II)('イスラエル人コミュニティ')についてのハリーファ令); TR, 4-III-30; RHA, V-29, 8, 15, VI-VII-30, 1-2; NERÍN, *Un guardia civil en la selva* (Barcelona, 2008), 198-201, 206.しかしガルシア・フィゲラスは、モロッコ人を念頭に置いて、「ヨーロッパ人、一般に文明化された人々」と言ったことがある (GARCÍA FIGUERAS (1926), 59)。19世紀末から1968年の独立に至るまでの赤道ギニア植民地での人種主義とその実際については、NERÍN (2008); NERÍN, *Guinea Ecuatorial, historia en blanco y negro* (Barcelona, 1998), 42-59参照。モロコ人ないしアフリカ人との対位でメトロポリのスペイン人が自らの立ち位置を定めようとしたり言説をつくり上げようとしたことについては、前掲MARTIN- MÁRQUEZの研究が参考となる (とくに、8-9, 42, 49-51, 57-62, 85-100, 193-198)。
- 40 TR, I-I-30.
- 41 RTC, VII-26, 151-152; BOZPEM, 1925, n.11 (10-VI), 1928, n.1 (10-I); NIDO, 297-298; RHA, I-28, 12-13; *Anuario Militar de España (AME)*, 1928, 1929; *Manual...*, 14-16, 83, 146; VILLANOVA(2006), 45-46.
- 42 各*Vademécum*; RTC, III-31, 48-52; *Los Ejércitos Coloniales. Conferencia desarrollada por el Coronel de E.M. Don JOSÉ ASENSIO TORRADO, en la Escuela Superior de Estudios Militares el día 18 de abril de 1931*(Ceuta, 1931), 47-50; AME, 1925, 1926.30年のFRIの原住民兵数を9,419とする文献もある(MORALES LEZCANO (1986), 118; MORALES LEZCANO, *Historia de Marruecos. De los orígenes tribales y las poblaciones nómadas a la independencia y la monarquía actual* (Madrid, 2006), 312)。FRIへの「ヨーロッパ兵」配置、リーフ戦争中の原住民兵力数、それに原住民兵リクルートの基本条件が原住民の生計維持だったことについては、深澤「スペイン領モロッコにおける「住民」兵の徴募と動員」『人文コミュニケーション学科論集』7 (2009) 参照。警備隊の隊員数は不祥。
- 43 AGMM, R675, 491-7, 28-VI-26; *Manual...*, 8; CAPAZ (1931), 17.以上の本文についても深澤 (2009) 参照。
- 44 1921～1931年の各AME; *Los Ejércitos Coloniales...*, 53.モロコ人士官についても深澤 (2009) 参照。
- 45 *Los Ejércitos Coloniales...*, 5-6, 23, 28-29.
- 46 RTC, II-28, 41-43; RHA, I-28, 1-6, I-30, 11; 深澤 (2009), 87, 102.
- 47 RTC, XI-26, 241 (FRANCO, 239-240に所収)。
- 48 BOZPEM, 1927, n.19(5-X); RHA, III-27, 8, V-27, 4, VI-28, 10, X-XI-XII-28, 23, III-IV-V-30, 11-12, VI-30, 10; TR, 19-XI-27, 3-26-I, 13-X-28; *El Ejército Español (EE)*, 29-XII-[19]27; RTC, XI-26, 241, II-28, 25 (FRANCO, 242-243, 251に所収), III-29, 74, VII-30, 187, VIII-30, 211, X-30, 258-260, XI-30, 273-275; AF, III-27, 95, IX-29, 392; *Acción...*, 684; *Acción.... Documentos*, docs.57, 58; GARCÍA FIGUERAS, *Marruecos (La acción de España en el norte de Africa)* (Madrid, 1942), 299. 最新の研究によると、27年7月時の外人部隊兵員数は4,150である (その83%はスペイン人)。29～30年頃の兵員数は4～5千人くらいと推測される (Miguel BALLEÑILLA Y GARCÍA DE GAMARRA, *La Legión 1920-1927* (Lorca, 2010), 102, 105-106, 364-366)。
- 49 NERÍN (2005), 19-21, 169; Capitán BERENGUER, *El ejército de Marruecos* (Tetuán, 1922), 81; RTC, II-29, 33, III-29, 74; *Los Ejércitos Coloniales...*, 5; Dámaso BERENGUER, *De la Dictadura a la República* (Madrid, 1975/1ed., 1935), 222; Carlos de ARCE, *Historia de la Legión española* (Barcelona, 1984), 199; BALFOUR, 251; José Luis RODRÍGUEZ JIMÉNEZ, *¡ A mí la Legión ! De Millán Astray a las misiones de paz* (Barcelona, 2005), 240.
- 50 軍アフリカ派についての主な文献として以下がある。Julio BUSQUETS, *El militar de carrera en España* (Barcelona, 1984/1ed., 1967) (アフリカ派は「[19]15年の世代」とも命名されている

- (96-105)); Andrés MAS CHAO, *La formación de la conciencia africanista en el ejército español (1909-1926)* (Madrid, 1988); Jorge CACHINEIRO, 'Intervencionismo y reformas militares en España a comienzos del siglo XX', *Cuadernos de Historia Contemporánea*, 10 (1988); Alejandro SALAFRANCA Y VÁZQUEZ, 'La conciencia africanista en el ejército español', *Actas del III Congreso Internacional de Hispanistas* (Málaga, 1998). 以下の研究ももちろん軍アフリカ派の意義を重視している。MADARIAGA (2002); BALFOUR (2002); NERÍN (2005).
- 51 *RTC*の発行部数は不詳。在モロッコ軍人を中心とした講読者がいだけでなく、マドリード、バルセローナ、アルカラ・デ・エナーレスの各キオスコ、それにいくつかの鉄道駅でも売られていたようだ (*RTC*, X-27, 244)。
 - 52 *RTC*, XII-28, 291.有力な軍内紙『軍通信』*La Correspondencia Militar (CM)*でも1軍人が、スペインでもフランスのような「植民地党」が必要だと説いていた (*CM*, 17, 18, 24-II, 28-III-[19]27)。
 - 53 *RHA*, XII-27, 5-6, X-30, 1-3; *RTC*, XII-30, 310, III-31, 68; *TR*, 19, 22, 27-VIII-30.
 - 54 マス・チャオもこのことを指摘する (MAS CHAO, 36)。
 - 55 このことについては、深澤「20世紀スペインの植民地戦争と徴兵制——貧者には血税、富者には金の税——」『人文コミュニケーション学科論集』10(2011)参照。
 - 56 サラフランカ・イ・パスケスも、スペイン軍アフリカ派を「独特の集団」と見ている (SALAFRANCA Y VÁZQUEZ, 18)。
 - 57 以上のことについては、深澤 (2002); 深澤 (2004-2005) で論じた。
 - 58 *RTC*, VIII-27, 196, XII-27, 289-290; *RHA*, II-30, 8.
 - 59 *RTC*, VIII-26, 169, III-28, 54-55, VII-28, 188, XII-28, 293-294, I-29, 6-7, II-29, 31-32, VIII-30, 198; *RHA*, I-II-27, 5-6, 11-13, XII-27, 15-16, III-IV-28, 1-2, V-28, 1, VI-VII-28, 3-5, VIII-IX-28, 5-7; *TR*, 18-XII-26, 30-I, 1, 2, 13-22-II, 11-III, 27-VII-27; *AA*, IX-26, 2493-2494, X-26, 2506; *Acción...*, 652-653; *Acción... Documentos*, doc.54.AFには26年7月～29年8月にほとんど毎号タンジャ関係の記事や論説が載った。もちろん同誌はスペイン側が現行タンジャ憲章 (23年) を「攻撃」していると書いた。次の書はタンジャのスペイン領編入を正当化するために書かれた。RUIZ ALBÉNIZ, *Tánger y la colaboración franco-española en Marruecos* (Madrid, 1927). タンジャまたスペインの国際連盟脱退をめぐる交渉については以下が詳しく検討している。SUEIRO SEOANE (1993), 337-396; TUSELL/QUEIPO DE LLANO, 41- 81.
 - 60 *RTC*, IX-27, 202-203 (FRANCO, 257-258に所収), III-28, 58-59, V-29, 106-107, XI-29, 259-262, XII-29, 284-296; *TR*, 24-VI, 10, 23-VII, 30-VIII-27, 5-I-28; *AF*, VII-27, 290 (*RHA*での西仏協調の論説は多いので、注記しない)。ルイス・アルベニスの上掲書もモロッコでの西仏協力の実績と必要性を繰り返し述べている。
 - 61 ジブラルタル海峡トンネル計画案は1860年に出されたことがある (1868年に中止)。今回の提案は1924年に始まったものである。*RTC*, VIII-28, 201, VI-29, 153-154, XI-29, 280, II-30, 33-41; *RHA*, XII-27, 19, VI-VII-28, 16-17, XI-29, 4; *AF*, IX-30, 479-484; *BOZPEM*, 1930, n.15 (10-VIII). 20世紀初頭のモロッコ分割に関わった元外相ペレス・カバリエーロも29年の講演で、このトンネル計画とくにセウタがカイロとアフリカ大陸南端への鉄道起点となることへの期待を表明した (Juan PÉREZ-CABALLERO Y FERRER, *España y Marruecos. Recuerdos del pasado. Exitos del presente. Visión del porvenir. Conferencia de divulgación diplomática. Pronunciada en el Ateneo Guipuzcoano de San Sebastián* (s.l., s.f.), 50- 51)。トンネル計画は共和政期にも引き継がれたが、メトロポリの内戦で頓挫した。
 - 62 *RTC*, II-27, 27, XI-28, 284; *RHA*, III-IV-V-30, 5-6. ほぼ同様の論調は以下にも見られる。*RTC*, IX-27, 202-203, VIII-30, 191; *RHA*, VIII-IX-29, 7. 植民地戦争遂行の理由付けとして反共産主義を持ち出すことは既にリーフ戦争中に始まっていた (深澤 (2004-2005), 3.2., 3.3., 3.4.; 深澤 (2007-2008), 3.2.2. 参照)。メトロポリの軍内3紙のいずれも反共産主義を表明していたが、そこでは共産主義を植民地での民族運動と結びつける論はあまり見られなかった (Cf., Carlos

- NAVAJAS ZUBELDIA, *Ejército, Estado y Sociedad en España (1923-1930)* (Logroño, 1991), 223-228)。「政治的あるいは社会的に危険」な思想を宣伝する者はスペイン領への移民を認めないとのハリーフア令も出された (BOZPEM, 1929, n.16 (10-VIII))。
- 63 CM, 6, 7-IX, 17, 18, 20-XI-26, 1-I-27; *Ejército y Armada (EA)*, 7, 17-IX-[19]26, 1-I-27, 20, 21-II-29; EE, 6, 7-IX-26; Gabriel CARDONA, *El poder militar en la España contemporánea hasta la guerra civil* (Madrid, 1983), 91-94, 99-100; Stanley G. PAYNE, *Politics and the Military in Modern Spain* (Stanford/London, 1967), 236-248; Carlos SECO SERRANO, *Militarismo y civilismo en la España contemporánea* (Madrid, 1984), 336-344, 351-354; NAVAJAS, 57-58, 63-67; Antonio CORDÓN, *Trayectoria. Memorias de un militar republicano* (Barcelona, 1977/1ed., 1971), 124-137, 144-149.
- 64 以上、RTC, X-28, 264; EA, 8-X-28; Julio FERRER SEQUERA, *La Academia General Militar. Apuntes para su historia* (Barcelona, 1985), 2vols.; Carlos BLANCO ESCOLÁ, *La Academia General Militar de Zaragoza (1928-1931)* (Barcelona, 1989); José IZQUIERDO NAVARRETE et al., *La Academia General Militar. Crisol de la oficialidad española* (Zaragoza, 2002); *La enseñanza militar en España. 75 años de la Academia General Militar en Zaragoza* (Madrid, 2003) に拠る。以上のうち、サラゴサ陸軍士官学校を批判的に検討したものはブランコのもののみである。同書は、「[サラゴサ] 陸軍士官学校の創設で、「98年の破局」以後のスペインに存在していた市民社会と軍人社会の乖離はさらに広まっていった」と見る (BLANCO ESCOLÁ, 58)。他に、*Anuario Estadístico de España*, 1929, 1930 (‘Instrucción militar’の項); EE, 23-IX-24, 20-XII-27; EA, 26-IV, 1-XI-27, 7-VIII, 6-X-28, 28-II, 31-V-29; BUSQUETS, 82-84, 118-121; NAVAJAS, 169-174; BALFOUR, 182; Francisco FRANCO SALGADO-ARAUJO, *Mi vida junto a Franco* (Barcelona, 1977), 77-104; CORDÓN, 139; Luis E. TOGORES, *Millán Astray. Legionario* (Madrid, 2003), 259-260.
- 65 ゴメス・ナバーロはその浩瀚なプリモ独裁研究の締め括りで述べた——プリモ独裁は「[在] モロッコ軍という本物の軍隊の形成と強化」という「決定的な遺産」を残した (José Luis GÓMEZ-NAVARRO, *El Régimen de Primo de Rivera. Reyes, dictaduras y dictadores* (Madrid, 1991), 531. ただ、このことは同書の本文ではあまり強調されていない)。ゴンサーレス・カルベも、モロッコでの勝利がプリモ独裁の継続に大いに有利に働いたこと、プリモ独裁中に軍アフリカ派の地位が強固となったことを指摘する (María Teresa GONZÁLEZ CALBET, *La Dictadura de Primo de Rivera. El Directorio Militar* (Madrid, 1987))。ナバーハスも、25年末以降にプリモ政権への軍アフリカ派の影響力が増大したことを指摘する (NAVAJAS, 282-283)。比較的最近の以下の研究は以上の3著よりも軍アフリカ派の意義を強調しない。Eduardo GONZÁLEZ CALLEJA, *La España de Primo de Rivera. La modernización autoritaria 1923-1930* (Madrid, 2005); Alejandro QUIROGA, *Making Spaniards. Primo de Rivera and the Nationalization of the Masses, 1923-30* (Basingstoke/New York, 2007)。
- 66 TR, 18-X-30, 18-I, 17, 19-II, 1-III, 11-IV-31; EA, 1-III, 29-V, 2, 16-XII-30, 6, 14-IV-31 (関連論説は、25-IV, 28-VII, 3-IX, 1-XI-30)。28年11月にEEはCMに吸収され、軍内紙は2紙となっていた。
- 67 同様の指摘は次にもある。MATEO DIESTE (1997), 61, 85。
- 68 新たなモロッコ民族運動は既に平定期にも予見されていた。とくにフランス領での「ベルベル勅令」(1930年5月)を契機とした民族主義運動のスペイン領への波及が警戒された (RHA, IV-27, 1, XII-27, 4, I-31, 1-4)。
- 69 モロッコ戦争とくにリーフ戦争の過程で「前ファシズム思想」が形成されたとする見方については以下を参照。Dionisio VISCARRI, *Nacionalismo autoritario y orientalismo. La narrativa prefascista de la guerra de Marruecos (1921-1927)* (Bologna, 2004); André BACHOUD, *Los españoles ante las campañas de Marruecos* (Madrid, 1988), 140; SALAFRANCA Y VÁZQUEZ, 19-20. この見方とも重なって、軍アフリカ派はモロッコだけでなくメトロポリをも「植民地化」しようとしたとの見解については以下を参照。BALFOUR, 315-316; NERÍN (2005), 297-299。

本稿作成に当たって参照したが、とくに注記しなかった文献（発行年順）

Shlomo BEN-AMI, *La dictadura de Primo de Rivera 1923-1930* (Barcelona, 1983).

Ramón SALAS LARRAZÁBAL, *El protectorado de España en Marruecos* (Madrid, 1992).

Carlos NAVAJAS ZUBELDIA, 'La primera época de la *Revista de Tropas Coloniales*: un estudio ideológico', separata de *Revista de Extremadura*, n.19 (I-IV-1996).

Youssef AKMIR CHAIB, 'Reflexiones sobre una revista colonialista militar "Tropas Coloniales, África (1924-1936)"', *Estudios Africanos*, Vol.XII, n.22-23 (1998).

Joan NOGUÉ/José LUIS VILLANOVA(eds.), *España en Marruecos* (Lleida, 1999).

Ismael SAZ, 'Foreign policy under the dictatorship of Primo de Rivera', Sebastian BALFOUR/Paul PRESTON(eds.), *Spain and the Great Powers in the Twentieth Century* (London/New York, 1999).

La Academia General Militar en Zaragoza. 75 años de convivencia (Zaragoza, 2002).

Josep FONTANA/ Ramón VILLARES(dirs.), *Historia de España* (Crítica/Marcial Pons), Vol.7, *Restauración y Dictadura*, Cap.7, 'Dictadura y cierre' (Javier MORENO LUZÓN) (2009).